第八章　琉球と球（七九〇）

神素盞嗚大神や
三五教の大教主
千萬無量の神界の
ワザヒに玉を交換し
負ひて聖地を出奔し
紅葉も照れる秋の空
峠を渉り谷を越に
南を指して進み行く。

國武彦の神言もて
言依別の神司
深き使命を蒙りて
其責任を一身に
國依別を伴ひて
暗に紛れて長宮の
杉の木立にまぎれつつ
丹波、篠山後に見て

高春山を伏拜み
漸く明石に着きにけり。
船を一隻買ひ求め
艪櫂を操り悠々と
暗夜を幸ひ高砂の
金剛不壞の如意寶珠
堅磐常磐に埋めたる
暗祈默禱やゝ暫し
暫く間に三柱の
聲嚴かに詔らすよう

池田、伊丹も東の間に
漁師の家に立寄りて
國依別と兩人が
波靜かなる瀨戸の海
沖に泛べる一つ島
紫色の寶玉の
松の根元に立寄りて
空中俄に明くなり
小さき女神現はれて
汝言依別神

先に埋めし寶玉は
守りゐませば此島に
一日も早く海原を
進みてテルの港まで
尊き神の御仕組
あゝ惟神々々
言ふかと見れば忽ちに
山の尾の上に靉きぬ
四邊芳香に包まれて
言依別は三柱の

我等三柱朝宵に
心を配らせ玉ふなく
神の惠に潔く
出立ち玉へ惟神
後程思ひ知られなむ
御靈幸はひましませと
姿は消えて白煙
忽ち空中音樂聞え
響方なき爽快さ
瑞の女神を拜禮し

國依別と諸共に　乘り來し船に身を托し
魚鱗の波の漂へる　大海原を悠々と
波のまに〳〵漕ぎ渡る。　あゝ惟神々々
御靈幸はひましませと　和田津御神に太祝詞
聲を限りに宣りつつも　荒ぶる波を分けて行く
いつしか瀬戸の荒海を　乘り越ゑ進む馬の關
戸島、男島に春の島　清島越えて琉球の
那覇の港に到着し　海邊に船を繫ぎおき
神のまに〳〵進み行く。

此島は琉球一の廣大なる浮島である。現代は其時代に比ぶれば殆ど海中に陷沒して其面積殆ど十分の一しか殘つて居ないが、此時代は隨分廣大な島であつた。二人は何ともなしに、此處に神業の秘まれあるかの如く感じ、茫々たる荒原を、足に任せて進み行く。

日は漸く西山に傾いて、ハーリス山の頂きのみ日光が少しく輝いて居る。

國依別「敬主樣、何だか此島を歩きますと、足の裏がボヤ〳〵する樣ですなア。何でも爰には不思議な玉があると云ふ事を故老から承はつて居りましたが、布哇へさして行く考へだつたのが、知らず〳〵にこんな方へやつて來ましたのは、何かの御都合でせうかなア」

言依別「確かに此島に御用があるのだ。餘り大きな聲では云はれないが、茲には琉の玉と球の玉とが永遠に隱されてある。それで琉球といふのだ。龍の腮の球と云ふの

は、此島にあるのだ。此玉を二個共うまく手に入れて、高砂島へ渡らなくては本當の神業は出來ないのだよ」

國依別「へー、それは大變ですな。果して左樣な物が手に入るでせうか。さうして其玉の在場所はお分りですか」

言依別「大抵分つて居る。國武彦大神樣より命令を受けて居るのだ。琉の玉は潮滿の玉球の方は潮干の玉だ。各一個づつ之を携へて世界を巡れば如何なる惡魔も雖も忽ち畏服すると云ふ神器である。あの山の頂きを見よ。太陽は既に西天に沒し、最早黄昏の帳は刻々に厚く下ろされて來たにも拘はらず、あそこ計りは晝の如く輝いて居るではないか」

國依別「成程、さう承はればさうですなア。どうしてあこ計り光るのでせう。日の出神さまが、先へ廻つて我々に茲だと御知らせ下さるのでせうか」

言依別「マアそんなものだらうよ。餘程日も暮れたなり、體も疲れて來たから、此邊で一夜宿を取り、明朝更めて登る事に致さう」

と幾丈とも知れぬ太き幹の、槻の木の下に、スタ〳〵と進み行く。國依別も無言の儘從いて行く。見れば槻の根元には縦五尺横三尺計りの洞が明いて居る。餘りの老木にて皮ばかりになり、中へ入り見れば全部洞穴になつて居て、所々に草で編んだ蓆などが散亂して居る。此木の洞は殆ど五十坪計りもあつた。益々奥へ〳〵と進めば美はしき草の莚、香りゆかしく布きつめてある。二人はそこに、草鞋をぬぎすて横たはり見れば、ガサ〳〵と音がする程、よく乾いた莚であつた。

國依別「隨分大きな樹木ですなア。併し乍らこれ丈綺麗に蓆が布きつめてある以上は、

何者かがここに住まつて居るのでせう。暗がりのことてハッキリ分りませぬが、どうやらここは人間の住家ではなからうかと思はれます」

言依別「ここは琉球王の隠れ場所だ。今日は都合に依りて數多の家來を引つれ外出をして居るのだが、今晩の夜中頃になれば屹度歸つて來るから、餘り驚かない樣にして呉れ。決して我々の爲に惡い者ではないから」

國依別「へーさうですか、そんな事を如何して貴方は御存じですか」

言依別「何事も玉照彦、玉照姫命を通じて、國武彦神樣より御知らせになつてゐるのだ。大變に面白い事が出て來るよ。サア是から揃うて天津祝詞を奏上し宣傳歌でも唱へて寢に就く事にせう」

國依別「ハイ有難う御座います。何とはなしに氣分のよい所ですなア」

と言ひ乍らゴロンと横になる。二人は白川夜舟を漕ぎつゝ、忽ち華胥の國に遊樂する身となつた。

丑滿刻と思はるる頃、國依別はフト目を醒ませば、入口の外面に當りて騒がしき聲が聞えて來た。

國依別「モシ〳〵言依別樣、大變な足音が致しました。サアどうぞ起きて下さいませ」

言依別は熟睡せしと見え

言依別「國依別、喧しく言はずに早く寢んか。ムニヤ〳〵〳〵、ウン〳〵〳〵」

とクレンと寢返りし又グウ〳〵と雷の樣な鼾をかき始めた。足音は刻々に近付いて來る。國依別は慌てて入口に只一人佇み、外面を眺め入つた。無數の明りは木の間を縫うて瞬き乍ら人聲ワイ〳〵と騒がしく、此方に向つて近寄り來るのであつた。

國依別『ハハー、此奴ア餘程澤山な人數と見ねるワイ。こりや斯うしては居られないぞ。一つ何とか工夫を致さねばなるまい』

と入口に立つた儘、腕を組み首を傾けて考へ込んで居る。

（大正一一、七、二四、舊六、一、松村眞澄錄）

第九章　女神託宣（七九一）

國依別は空洞の入口に立ち、刻々に近より來る人影、鐸火の光を眺めて獨語

國依『あの業々しい松明の光り、數多の人の足音、唯事ではあるまい。万一猛惡なる土人の襲來せし者とすれば、到底我々一人や二人、如何に言靈の神力を應用すればとて、容易に降服致すまい。權謀術數は神の許し玉はざる所なれ共、爰は一つ言依別樣の御睡眠を幸ひ茶目式を發揮して、裏手を用ひ、寄せ來る數萬の連中をアッと驚かせ、荒肝を取りて置かねばなるまい。オ、さうぢや〳〵』

と諾き乍ら入口の暗がりに、ポンヤリと浮いた樣に立つて居る。最早間近くなつて來た。暗がりにも確に男女の區別位はつく樣になつた。先頭に立つた人の姿を見れば、

確に白髪の老人らしい。國依別は突然洞穴内より虎狼の吼たける如き唸り聲を立て、力限り

「ウーッ」

と唸つて見た。其聲は洞穴内に反響して一層巨聲になつた。外の男二三人小聲で

「ヤアこりや大變だぞ。我々がハーリス山へ龍神征服の爲に行つて居つた不在中に何だか怪しい虎狼か或は龍神の片割れか、先廻りして我々の天然ホテルを占領しやがつたと見ゐる。コリヤうつかり這入らうものなら大變だぞ。オイどうだ、數歌を唱へて征服して見ようぢやないか」

國依別はさとくも其囁きの一端を耳に挾み

國依「ヤア面白い、虎狼か龍神の片割れだらうと云つて居るな。ヨシ此方にも覺悟がある」

と獨語し乍ら、滿身の息をこめて、反對にこちらから「一二三四五六七八九十百千萬」と含んだ樣な聲でワザとに吼鳴つて見せた。此聲と共に今迄木の間に瞬いてゐた松明は、言ひ合はした樣にパッタリと消ゐて、洞穴の内外は眞の暗となつて了つた。寄せ手は驚いて、魔神に自分等の所在を探られない爲と火を消したのであつた。外からは流暢な聲で天の數歌が聞ゐて來た。一同はそれに合して、森林の木霊に響く聲、天にも屆く計り思はれた。大勢の中より一人の男稍近くに進み來り、大麻を左右左に打振り乍ら

「ヤア我々の不在中を狙つて住み込む奴は大蛇か、曲鬼か、或は猛獸か、言語の通ずるものならば、速かに返答致せ。それとも畜生ならば、一刻も早く此處を退散致

せ。若し神樣ならば御名を名乘らせ玉へ」

國依別は何だか其言葉に馴染のある樣な氣分がした。併し乍ら此琉球の離れ島に我々の知人が來て居るべき筈もない。あの聲は確に男子であつた。そうして何となく言靈が冴えて居た。こりや決して案ずるには及ぶまい。機先を制するは今此時だ……と心に思ひ乍ら、暗がりを幸ひ

國依「アール、シヤイト、チーチヤーバンド、ジヤンジヤヘール、サーチライト、バックス、エール、シーエー、ビック、ホース」

と云つた。

外の男「ヤア此奴ア南洋の土人が漂着して來よつたのだなア。天の數歌まがひの事を言つて居やがつたぞ。大方ジヤンナの鄕の三五教の信者が、此島に漂着して此洞穴を見付け出し、這入つてゐやがるのだらう。困つた奴が來たものだ。土人の言葉はこちらでは分らないし、如何云つてやらうかなア」

國依別「此方はハーリス山に、遠き神代の昔より往居致す大龍神であるぞよ。此度神勅に依つて高天原より言依別命、其玉を受取りに御越し遊ばされたるを以て、今迄大切に保存して居た琉、球の二つの玉も、已むを得ず御渡し致さねばならぬ事になつて來た。神勅はもだし難し。執着心を去つてスツパリと渡し切る考へだ。此二つの玉の琉球を去るや否や、如何なる事が出來致すも分りはせぬぞ。其方は我を是より藏の神と尊敬致し、此洞穴の中を我居宅に献り、山海の珍味を以て供養せば、地異天變の災害を免れしめ、汝等一同をして安く樂しく長壽を奥へ、天國の喜びを永久に保たしめむ。返答如何に」

と聲まで十七八位の女になつた氣で、若々しげに述べ立てた。外の男の一人稍前に進み寄り

外の男『早速のあなたの御承諾、若彦身にとりて、有難く仕合せに存じます。先日より一日も欠かさず、ハーリス山に駈上り、言靈を手向け候處、龍の腮の琉球、容易に御渡し下さる形跡も見ねず、實の所は、心中稍不安の念に驅られて居りました。其お言葉を聞くからは、これなる土人に命じ、あらゆる珍らしき果物を持たせお供へ致します。どうか今迄の樣に時々暴風雨を起し、人民を苦むるなどの暴行は是れ限り御止め下さりますする樣に、三五教の宣傳使若彦、慎んで御願致します』

國依別中より

國依別『言ふにや及ぶ。我こそは國依……オット違うた、國よりも我身が大事と、今迄は執着心にかられ、琉球、球の二つの玉を私有物として樂しんでゐた。そうして此玉を以て、風雨雷霆を驅使し、種々雜多の亂暴を致したが、今日限り根本より悔ひ改めて若彦の言葉に從ふ程に、必ず〳〵心配致すな。サア早く芳醇なる酒を献じ、林檎、バナナ、龍眼肉を我前に献上致せ。隨分空腹に惱んで居るぞよ。言依別神樣やがて日を移さず、此處に御越しあらん。大勢こゝに集まるも無益なれば、大半は濱邊に到つて言依別樣御到着の御出迎への準備をいたすがよからうぞ。其時には三五教の大宣傳使國依別お供に仕へ居る筈なれば、待遇に區別をつけず、極鄭重にもてなしを致せよ。ハーリス山の龍神、汝等一統に氣をつけるぞよ。若彦、及び其前に立つ白髪の老人も申しわたす仔細あらば此處に居よ。其他の住民共は濱邊へさして一刻も早く御迎へに參り、萬事落度なく心を配り氣を配れよ。ウー、、、

と唸り止んだ。

若彦『委細承知仕りました。……モシ常楠様、あなた何卒、大勢の連中に此由を御傳へ下さいまして、言依別様の御到着の待受準備にかゝるべく御命令下さいませ』

常楠『ハイ承知致しました。併し乍ら嘘ではありますまいかな。どうも我々の考へでは言依別命様は、此洞穴内に安々と御休みなされてるような心持が致します。そして此龍神の化身女神様は、私の心のひがみか存じませぬが、國依別様のように思はれてなりませぬ。惡戯好の國依別の宣傳使の事とて、ワザとに女神の聲色を使つて居られるのでは御座いますまいか。數多の土人を引つれ濱邊へ參り、言依別命様今か〳〵と待呆けに遭はせ、あとでアフンとさして大笑ひをせうと云ふ企みだなからうかと思はれます。そんな手に乘るものなら、折角我々を神と信じてる土人の信用はサツパリ地におち、却て我等の身邊に危險の及ぶやも計り知れませぬ。コリヤうか〳〵と聞く譯には行けますまいぞ』

國依別洞穴内より、一層やさしき女の作り聲で、甲高に

國依別『來るか〳〵と濱へ出て見れば　濱の松風音ばかり

待ちに待つたる國さんは　遠の昔に此島に

上つて御座るを知らないか　ホンニ盲は仕樣がない

ア、惟神　々々　御靈幸はひましませよ』

と追々鍍金がはげて、知らぬ間に自分の地聲になつて居たのに氣がついた。

『ヤア是りや失策つた』

と思ひ乍ら、又聲を改めて

國依「我こそは琉と球との玉を守護致す國依別の姫神であるぞよ。國依別とはタマで代物が違うぞよ。國依別が例へば黄金なれば、此方は銅位なものであるぞよ。今迄の國依別は、實に困つた奴であつたなれども、身魂の因縁現はれて此頃は、立派な〳〵言依別命の片腕にお成り遊ばして御座るぞよ。其方は紀州の邊鄙に永らく蟄居致して居つた故、知らぬは無理なきことであるぞよ。今に國依別命參りなば鄭重にいたし、琉、球二つの玉を汝等手に入れなば、一は言依別命に献じ、一は國依別命に献ぜよ。これ國依姫命の御心であるぞよ。ゆめ〳〵疑ふこと勿れ」

若彦「ハイ承知致しました。誰の御手に渡しまするも天下を救ふ寶玉ならば、結構で御座います。三五教の物とならば之に越したる喜びは御座いませぬ」

常楠小聲で

常楠「モシ若彦さん、どう思ふても私は腑に落ちませぬ。……コレ〳〵女神と稱する國依別さん、良い加減に茶目式を發揮しておいたらどうだい。そんな事ァ若彦さんなれば、一時誤魔化しが利くだらうが、何もかも世の中の辛酸を嘗めつくした此常楠の前には通用致しませぬぞよ」

國依「眞偽の判斷は其方に任す。我に從ひ遠慮は要らぬ。汝等兩人奥の間に進み來れ」と先に立つて暗がりを進んで行く。

國依「待てよ、前へ無茶苦茶に進むと云ふと、壁際に頭を打ち、言依別樣のお眠みの上を踏みなどしたら大變だ。コリヤ一つ松明をつけさしてやらうかな」

と小聲で囁き乍ら

國依「ヤア若彦、松明をつけよ。暗くて少しも見らぬでないか」

若彦「私はこゝへ參つてから餘程慣れましたから、松明がなくても大抵分つて居ますあなたは神樣なれば夜目が見ゑさうなものですなア……神は無遠近、無大小、無明暗、無廣狹、一も見ざるなしと云ふではありませぬか」

國依別ヒヤリとし乍ら、尙も莊重な口調にて

國依「若彦、馬鹿を申せ。暗がりに目の見ゑる者は畜生であるぞよ。人間は暗がりに目の見ゑぬのは神の分霊たる証據であるぞよ。すべて高等動物になる程、夜分に目が見ゑないものだ。それだから最高級にある神は目が見ゑぬが道理だらうがな。それだから人民が神に燈明を献ずると云ふ事を知らないか」

常楠吹き出して

「オホ、、、」

國依「アイヤ常楠どやら、神の言葉が何故それ程可笑しいか」

常楠「あなたは餘程鈍な神樣と見ゑますな。道路神とかいつて、盲神樣があると云ふ事だ。大方お前さんは道路神か道樂神だらう。宗彦、お勝の昔を思ひ出しになつたら、さぞ今日は感慨無量で御座いませうなア」

國依「何でも宜しい。炬火をつけて下さらぬか。實は御察しの通り國依別ですよ。アハ、、、」

常楠「オホ、、、」

若彦「なんだ、又いかれたか。エー仕方がない。よく化ける男だな。そんなら炬火をつけて上げませうかい」

と懐より燧石をとり出し「カチ〳〵」とやつて居る。言依別は二三人の人聲何かザ

ワ〳〵聞ゐるのに目をさまし、耳をすまして聞いて居れば、國依別とか常楠とか若彦とかの聲がきこゑて來た。

「ハテなア」

と無言のまゝ考へ込んで居る。どうしたものか火は打つても〳〵火口につかぬ。

若彦「ア、今日は盲の神さまの守護と見ゐて、暗がりの御守護らしい。何程打つても火は出ませぬワ。……ナア常楠さん、如何しませう」

常楠「エー仕方がない。そんなら暗がりで休んませうかい。……時に國依別さん、言依別の敎主樣はこゝに居られるのだらうな。ウカ〳〵歩くとお眠みになつて居る所を踏みでもしたら大變だから、在否を言つて下さいな」

國依「お前さんの最前仰せられた通り、盲神の國依別、まして此暗夜、言依別樣の在否が見ゐて堪りますか。アハヽヽヽ」

言依別「命は聲を掛け」

言依「イヤ國依別、何とかして火をつけて呉れないか。常楠、若彦の兩人が見ゐて居るであらう」

國依「ハイ、確にお見ゐになりませぬ。あなたでさへも見ゐぬ位ですから……」

言依「暗がりで見ゐるか見ゐぬかと云つたのだない。來て居られるか居られぬかと言ふのだ」

國依「來て居られますが、サツパリ見ゐて居られませぬ。アハヽヽヽ」

かくする所へ入口よりチヤール、ベースと云ふ二人の男、松明をかがやかし乍ら這入つて來た。

チャール、ベース兩人腰を屈めて

兩人「嘸御不自由で御座りましたでせう。ついうつかり致してをりました。松明をこゝに灯しておきますから……私は入口に立番を致しますから、御用があらば直に手を御拍ち下さいませ」

國依「ハーリス山の龍神、國依姫命、チャール、ベースの兩人、よくも氣を利かしよつた。神滿足に思ふぞよ」

兩人「ハー、有難う存じます」

と恐る〳〵、坑外に出て行く。坑内は二つの松明にて晝の如く明くなつた。所々に節穴の窓が開いて居た。煙は其穴より逸出するを見ねて、少しも、けむたさを感じなかつた。

言依別命は起き上り、行儀よく菅莚の上に端坐し、常楠、若彦の顏を見て

「ヤア」と言つた。

若彦「これは〳〵敎主樣、よくも御入來下さいました」

と早くも嬉し涙に暮れて居る。

言依「若彦殿、御苦勞で御座つた。此老人は噂の高い秋彦、駒彦の緣類なる常楠翁かな

ア」

若彦「ハイ左樣で御座います」

常楠「敎主樣、一度御伺ひを致したく存じて居りましたが、遠方の事と云ひ、老人の事とて山道を歩むのが辛勞になり、つい御無沙汰致して居りました。悴共が篤き御世話に預りまして、有難う御禮申し上げます。今度は私も千騎一騎の最後の活動

と思ひ、神恩の萬分一に報ぜんと、若彦様のお伴をなし、先日より此島へ參り、ハーリス山の龍神に向つて、言霊戰を開始して居ります。其御蔭で毎日毎晩吹き荒ぶ暴風も凪ぎわたり、それが爲土人は我々二人を大變に神の如く尊敬いたして居ります。どこへ行つても日輪さまの御光は照らせ給ふ如く、大神様の御神德の滿遍なく行きわたつて居らせられるには感謝の至りにたへませぬ。何分老碌爺の私、どうぞ御見捨なく御用命あらん事を懇願仕ります」

と言ひ終つて、嬉し涙を袖に拭ふ。

言依「神様の御示し通り、これで愈〳〵四魂揃ひました。玉照彦様、玉照姫様の御神力は今更乍ら恐れ入るの外はありませぬ。いよ〳〵願望成就して、琉、球の寶玉手に入るは目のあたりでせう」

常楠「最早九分九厘まで、龍神は歸順して居ります。モウ一つ執着心さへ取れゝば渡して呉れるでせう。我々は若彦さんと共に能ふ限りの最善のベストを盡して來ましたが、モウ此上は教主様の御力を借るより仕方がありませぬ」

若彦「如何に神様の御仕組だと云つても、かような所で教主様にお目にかゝるとは、今の今迄、神ならぬ身の存じて居りませなんだ。アヽ人間は脆いもので御座いますワイ。現に目の前に居る國依別さんにさへ瞞された位で御座いますから」

國依「クツ〳〵〳〵、ウツブーッ」

と吹き出して居る。

言依「國依別さん、此島へ來た以上は餘程謹嚴の態度を持つて居て貰はぬと、中々强敵ですから、茶目式所ぢやありませぬぞ」

國依「左樣で御座います。斯樣な所で茶目坊をやつても、サッパリ茶目ですから、只今限り左樣なことは茶目に致しますから、どうぞ御心配下さいますな」

言依「仕方のない面白い男だなァ」

若彦、肩をゆすり乍ら、可笑しさをこらへて

「キユーー〳〵」

と言つて居る。常楠は何が可笑しい、若い奴と云ふ者は、箸のこけたのでも可笑しがるものだ……と云ふ樣な態度で眞面目くさつて控へて居た。漸くにして夜は明け放れた。言依別命は三人の外にチヤール、ベース外四五人の土人を引率し、ハーリス山の谷道を若彦の案内にて進む事となつた。

（大正一一、七、二五、舊六、二、松村眞澄錄）

第一〇章　太平柿（七九二）

紀州熊野の片畔
朝な夕なに宣べ傳ふ
常楠爺さんと諸共に
御禊祓の最中に
心の花の開くなる
木花姫の忽然と
言葉靜かに宣らすやう
旅裝を整へ船に乘り

天地の神の御教を
二五教の若彦が
熊野の瀧に參詣で
現はれ出でし姫神は
蓮華の山の守り神
瀧の畔に現れまして
汝は是より常楠と
熊野の浦を立ち出で、

浪間に浮ぶ寶島
いや永久に納まれる
山に棲まへる荒神を
腮の珠を受け取りて
玉照彦や玉照姫の
高天原の聖地より
風依別の宣傳使
汝はそれに先だちて
ハーリス山の深谷に
神の息吹に言向けよ

琉と球との瑞寶の
聖地に到りてハーリスの
言向け和し龍神の
三五教の神司
貴の御前に奉れ
言依別を始めどし
後より來り給ふべし
此神島に到着し
棲む龍神を言靈の
木の花姫は汝が身の

前に後につき添ひて
一日も早く進めよと
早や御姿は消ゆ給ひ
四邊に薫る床しさよ
稍を渡る科戸邊の
耳も若やぐ若彦が
樟の老木生ひ茂る
神の御言を畏みつ
ハーリス山の麓なる
暫時の住家と定めつつ

必ず功績を建てさせん
言葉終ると諸共に
後に芳香馥郁と
幽玄閑雅の音樂は
風に相和し面白く
常楠伴ひ天を覆ふ
熊野の森を後にして
浪のまに〳〵出で來り
槻の大樹の洞穴を
日日毎日龍神を

言向け和す其爲に
嶮しき山坂昇降し
盡して神業に仕へける。
出現遲く暇どりて
歸りし頃は夜半頃
我が洞穴に近づきて
虎狼か鬼か蛇か
異樣の物影忽ちに
四邊に響く大音に
小聲になりて數歌を
數多の土人に侍かれ
心の限り眞心を
今日は殊更龍神の
愧の大木の假宅に
數多の篝火かゞやかし
外より中を眺むれば
はた龍神の化身にや
嘯く聲はウーく
若彦膽を潰しつつ
唱へ終れば中よりも

聲調揃はぬ怪聲に
七八つ九つ十たらず
若彦大地に平れ伏して
虎狼か鬼か蛇か
名乘らせ給へと呼はれば
ハーリス山の龍神が
言依別や國依別の
夢々疑ふ事なかれ
正直一途の性質
感謝の涙に暮れて居る
一二三つ四つ五つ六つ
百千萬と應酬する
藏く胸を押へつつ
但は藏の神樣か
國依別は聲を變へ
琉と球との寶玉を
神の司に授くなり
是を聞いたる若彦は
藏の神と喜んで
常楠爺さんは怪しんで

心の僻みか知らねども
思へぬ節がやつとある
國依別の宣傳使
息を休ませ給ふらん
三五教の國依別の
發揮したるに相違なし
早く正体現はせと
察知の言葉に耐りかね
忽ち化は現はれて
洞穴内に押し入つて
龍の化身の姫神と
言依別神様や
此洞穴に入りまして
此姫神は正しくも
神の司が茶目式を
これ〳〵國依別さんよ
云ふ間もあらず國依別は
思はず吹き出す笑ひ聲
茲に三人暗黒の
闇に彷徨ひ燧石

カチ〳〵打てど何故か
三人闇に包まれて
四邊を探る折柄に
此場現はれ入り來り
忽ち表へ駆け出す
三人の姿を透し見て
久方振りに四方山の
あゝ惟神々々
四魂揃ふて神人は
四五の土人を從へて
今日に限つて火は出でぬ
盲の神の垣覗き
松明持つて兩人が
其處に明火を立て置いて
言依別は起上り
不意の邂逅祝しつつ
話と共に夜は明けぬ
尊き神の引き合せ
旭の光を浴びながら
棕櫚や花櫚の生ひ茂る

林の中を掻い潜り　　土柔かくほか〳〵と
足を沒する山麓の　　小徑を踏占め登り行く。
冬とは云へど雪も無ければ霜も降らぬ、自轉倒島の夏の如き陽氣に、汗を垂らしながら脛を沒する灰のやうなボカ〳〵道を踏み慣れぬ足に登つて往く。

國依別は空腹に耐ゑ兼ね、傍の芭蕉の葉を一枚剝つて之を四つに疊み、敷物の代りにして路傍にドッカと坐し、左の手を膝に上向けにチンと乘せ、右の手を握り食指のみ、ヌッと前に突き出し、大平柿の甘さうに斷崖絕壁に實つて居るのを見て、喉を鳴らせながら無言の儘坐つて居る。言依別、若彥は七八間も先に立つて居る。國依別の後から從いて來た常楠、チャール、ベース其他の土人は、國依別の態度に不審の念晴れず、ジッとして顏を見詰めて居た。國依別は膝の上に乘せた左の手を一二回上げ下げし乍ら、右の手の食指にて向うの柿を指し、次で自分の口を指し、又柿を指し又口を指しやつて居る。

常楠「モシ〳〵國依別さん、此常楠は年は老つても耳は近いのだから、そんな仕方をせずに、口で言つたら如何ですか」

國依別は自分の口を指し又柿を指し、遂には腹を指して見せた。

常楠「察する所あの柿が食ひたいと仰有るのですか。そんなら今喰はして上げませう。これ〳〵チャールさん、誰か此中で木登りが上手な人、此谷を向うへ渡つて、あの甘そうな柿を二つ三つ採つて來て下さらぬか。國依別の喉の神さんが彼の柿を獻れよと御命令して御座る」

チャール「ハイ畏まりました。併し乍ら彼處に殘つて居るあの柿は、龍神さんの柿と云つて、

人間の喰ふ物ぢや御座いませぬ。若し一つでも喰はうものなら、男女に拘はらず、忽ち腹が膨れ、遂には臍がはぢけて、大蛇の兒が生れ、親はそれつ切り國替致すと云ふ險呑の柿です。それ故誰も採つた者もなければ、食つた者もありませぬ。從つて其味を知る者もないのです。此方に龍神樣が御憑りになつて居られますのかなア。そんなら龍神さんに御上げ申す積りで、取つて參りませうか」

ベース　「オイ〳〵、チャール、そう安請合をするものぢやないぞ。何程常楠樣が天降つた神樣だと云つても、龍神の柿を自由になさる事は出來ない。又假令御憑りになつても、それは嘘だから、ムシャ〳〵お食りになる筈がない。お食りになるとすれば此方の肉體が食ふのだから、それこそ大變だ。サア往かう。若彦樣や言依別神樣は最早御姿が見えなくなつて了つた」

國依　「汝チャール、ベースの兩人、其爭ひは尤もだ。併し乍ら此方は眞の龍神の化身、元の姿の儘ならば谷間に下つて鎌首をキユウと立て、舌をニヨロ〳〵出せば、手もなく口にニユッと這入るのであるが、斯う人間に化て居る間は、ヤッパリ人間並に採ることが出來ない。神が命令する、チャール、ベース早く採つて參れ。苦しうないぞ」

チャール　「ハイ畏まりました」

ベース　「苦しうないと仰有いましたねえ。そりや其筈だ。ジッとして芭蕉の葉の上に安座をかき、人に苦しい思ひをさして、あの柿を取り、居乍らにして据膳を戴き遊ばすのだちの、何が苦しいものか。樂なものだよ」

國依　「グヅ〳〵申さずに早く採つて献上致せ。國依別空腹に依り、最早一歩も歩行けな

くなつて、爰に極樂往生を致しかけたぞよ」

常楠「オッホ、、、」

チャール、ベースの兩人は、猿の如く斷崖を下り、可なり深い谷川の點在せる岩の頭を飛び乍ら、流を避けて向う側に渡り、柿の木に喰ひついて二人は登り行く。水の垂る樣な甘さうな柿が、幾つともなく澤山に葉の蔭にぶらついて居る。其大きさは牛の睾丸位確かにある。チャール、ベースの兩人は得も言はれぬ甘さうな香に耐りかね、自分の使命を忘れて一生懸命に甘さうな奴から、採つては食ひ〳〵、舌鼓を打つて居た。常楠は下から聲を掛け

常楠「コレ〳〵、チャール、ベースの兩人、柿を落さないか」

此聲にチャールはフト氣がつき

チャール「今落しませう。併し斯んな柔かい柿を落せば、潰れて了ひます。牛帽容れ物もなし、私の腹の中へ容れて持つて下りますから、待つて居て下さい」

常楠「ここに龍神さんがお待兼だ。少し固くつても良いから、むしつて此方へ抛つて呉れ」

チャール「堅いのは澁くつて喰へませぬぞ」

常楠「エー仕方がないなア」

國依「あゝ斯うして居て、人が甘さうに食うて居るのを見ると、腹が餘計空くようだ。エー仕方がない、人を力にするな、師匠を杖に突くなと、神樣が仰有つた。人の力で甘い柿を採つて、德を取らうと思つても駄目だ。ドレ自分の事は自分で埒をつけろに限る」

ぺこ〳〵した腹を抱へ、二重腰になつて、斷崖を辷り落ち、谷川から浮き出した岩の頭を、ポイ〳〵と飛び越ね、辛うじて對岸の柿の根元に着いた。見れば二人は蠶が桑の葉を食ふやうに、小口ごなしに赤い甘いのを平らげて仕舞ひ、下の方には青い澁いのがぶら下つて居る。國依別は空を仰ぎながら

國依「オーイ、チャール、ベースの兩人、些と赤いのを殘して置いて呉れよ。今登るから……」

と柿の節だらけの瘤に手をかけ足をかけ、やつと一の枝に取りつき下を見れば、激潭飛沫の谷川、凄慘の氣に襲はれ、空腹の上の事とて目も眩む樣な感じがして來た。國依別は漸くにして一方の細き枝に身を寄せ

國依「ア、危いものだ。この枝が一つペキンと折れやうものなら忽ち寂滅爲樂だ。併し怖い所に行かねば熟柿は食へんぞよと神樣が仰有つた。美味しい熟柿は矢張り怖い所にあるものだナア」

と呟きながら辛うじて美味さうな奴を一つむしり、飛びつくやうに矢庭に頬張つて見た。何とも云へぬ美味で思はず目も細くなり、顏に皺を寄せて翫賞した。忽ち腹は布袋の如くに刻々に膨れ出した。

國依「ヤア此奴は耐らん、チャールの云ふやうに大蛇が腹に宿つたのかなア。何だか腹の中がクレ〳〵として來たぞ。天足、胞場の昔のやうに体主靈從になつて仕舞ふのではあるまいかなア。高山の伊保理、低山の伊保理を柿わけて食し召せと云ふからは、強ち神罰も當るまい。ア、愚圖々々して居ると腹が大きくなつて下りられないやうになる。あゝ惟神〳〵々々靈幸倍坐世」

と樹を下りんとする。相當に黑い大きな大蛇、龜甲型の斑紋を光らせながら絡繹として柿の樹目蒐けて上つて來る嫌らしさ。國依別は一生懸命に一二三四と天の數歌を唱へた。

國依別は追々登り來る勢猛き惡蛇に僻易し、樹上より兩手を擴げて空中を掻きながら、谷川の蒼味だつた深淵の上にドブンと落ち込んだ。逆卷く浪に捲き込まれて暫くは其姿も見えなくなつて仕舞つた。蛇は急速度をもつて數限りなく柿の木に上つて來る。

チヤール、ベースの兩人は、國依別の飛び込んだ青淵目蒐けて又もやドブン〳〵と飛び込んで仕舞つた。パッと立つた水煙と共に二人の姿は又々消えて仕舞つた。

あゝ此三人の行方は何うなつたのであらうか。

（大正一一、七、二五、於六、二、加藤明子錄）

瑞月

入洲國　しのぎを　削る　世の　中に　心許すな　神國の　人

亂れたる世を思ふ身は一日だに息長かれと祈りこそすれ

何事も　神の　敎に　まかすこそ　人の誠のこゝろなりけり

第一一章　茶目式（七九三）

言依別に從ひて　ハーリス山に登り行く
國依別はその途中　谷の向ふに美はしく
枝もたわゝに實りたる　太平柿を見るよりも
俄に食慾勃發し　空腹まぎれに道端に
芭蕉の葉をば敷具とし　悠々端坐なし乍ら
彌勒如來のその如く　左手を腿にチョイと載せ
右手の拳を握りつゝ　食指を突き出して
無言の儘に谷底の　太平柿を指さしつ

續いて我口我腹を　幾度となく指示し
チャールヽペースや其他の　木登り上手の人あらば
谷間を越えて攀上り　さも甘さうな彼の柿を
われに一二個獻れ　口に言はねど仕方にて
類りに示す可笑しさよ　ハーリス山の龍神が
餌食としたる太平柿　野心を起し人々が
一個なりとも取るならば　忽ち神の御怒りに
觸れて腹部は膨脹し　遂には蛇の子を生みて
生命を果すと聞えたる　危險極まる果實なり
國依別の食慾は　旺に起り矢も楯も

怵らぬまゝに常楠に
常楠不安を感じつゝ
チャール、ベースに命令し
充しやらんと氣を配る
託宣否むに由も無く
谷間に下り激流の
飛び越ゑ〳〵向ふ側
抱いて空を眺むれば
二人の鼻をついて來る
猿の如く攀上り

採つて呉れよと促せば
已むを得ずして供人の
國依別の要求を
チャール、ベースは生神の
蔓に下つて絶壁を
中に浮べる岩頭を
漸く渡りて柿の根を
甘さうな香がプン〳〵と
忽ち二人は意を決し
蠶の虫が桑の葉を

食ひつくす如小口から
物をも言はず大口を
餘りの甘さに兩人は
一生懸命むしり取り
忽ち膨れた布袋腹
鰒の木登りした樣な
國依別は打仰ぎ
落して呉れと呼ばはれど
生命知らずに食つて居る
三五教の神の教

赤い熟柿をむしり取り
開いて頬張る可笑しさよ
己が役目を忘却し
遮二無二口に放り込めば
息をスウ〳〵喘ませつ
怪体な姿となりにけり
一つでよいから甘い奴
馬耳東風の兩人は
國依別は思ふやう
必ず人に賴るなよ

わが身の事は我身にて
芭蕉葉の席を立上り
蔓を力に谷底に
柿の大木に抱きつき
茲に息をば休めつゝ
激流飛沫の水煙
肝も扳かるゝ許りなり
猿の如く飛び交ひて
生命知らずに食つてゐる
危き所に上らねば
やらねばならぬと云ひ乍ら
猿の如く斷崖を
漸く下り對岸
登りついたる一の枝
眼下を見ればいと高く
水聲轟々凄じく
頭上の二人は右左
五臟六腑の裂ける迄
國依別は怺りかね
甘い熟柿は食へないと

生命を的に細枝に
一つの熟柿をむしり取り
口にふくめば忽ちに
漸く苦しくなりにけり
龜甲形の斑紋ある
目を瞋らして上り來る
進退茲に谷まりて
運をば天に任せつゝ
激潭飛沫の青淵を
ザンブと計り水煙
つかまり乍ら漸々に
天下無上の珍味ぞと
腹はふくれて吹く息も
柿の根元を見下ろせば
大蛇の群の數多く
その形相の凄じさ
國依別は意を決し
生死の外に超越し
目蒐けて飛込む放れ業
立つよと見る間に國依別の

姿は水沫と消ゑ失せぬ
上り來れる蛇を見て
珍の命が飛込みし
これ又姿は消ゑにけり
眺めて居たる常楠や
驚き騒章ワイ〳〵と
三人の姿は何處ぞと
狂ひ廻るぞ是非無けれ
いと轟々と吹き荒ぶ
斯る事とは知らずして

チャール、ベースの兩人は
怖れ戰き國依別の
青淵目蒐けて飛込めば
此有樣を目の當り
四五の土人の供人は
谷の流れに沿ひ乍ら
右往左往に奔走し
谷間を渡る風の音
言依別や若彦は
三五歌の宣傳歌

聲も涼しく歌ひつゝ　谷を傳ひて奥深く
足を早めて進み行く。

常楠は茲に於て迷はざるを得なかつた。肝腎要の御神業に參加せざればならず、又國依別以下を助けなくては人間の道が立たず……。

常楠「アヽどうしたらよからうか。末代に一度の此御神業を外しても、國依別その外を助けねばならぬであらうか。それだと云つて、國依別の生命もヤッパリ一つだ。グヅ〳〵して居れば取返しのつかない事になつて了ふ。彼方に盡せば此方を救ふ事が出來ぬ。此方を救はんとすれば、大切な御神業を放棄せねばならず。神樣の御命令は最も重く、人命も亦實に大切である」

兎やせん角やせんと寸時は四五間の間を上りつ、下りつ處置に迷ふてゐた。

常楠「ア、グッ〳〵してゐると、一方は息の根が止まつて了ふ。御神業は半時や一時遲れたとこで動まらない事は無い。オーさうだ。國依別を助ける方が本當だらう」と獨語云ひ乍ら、土人の聲する方を尋ねて谷川を傳ひ、灌木を分けて下つて往く。四五丁下流に當つて四五人の供人は聲を限りに

「アレヨ〳〵」

とさゞめいてゐる。見れば三つの黑い影、浮きつ沈みつ激流に流されて下り往く。何分兩方は壁の如き岩、容易に近寄る事は出來ない。常楠は大聲を上げて

常楠「下流へ〳〵」

と呼ばはり乍ら、一目散に下流を指して十丁許り駈出した。

茲には谷川箱廣く開展し、水も餘程淺くなり流れも亦緩やかになつて、川底の小砂利迄がハッキリ見ゆて居る。常楠を始め四五の供人はザブ〳〵と川に飛入り、流れ來る三人の身体を拾ひ上げんと横梯陣を作つて待つてゐる。

漸く流れついたのは國依別、續いて二人も無事に茲に流れて來た。各一人の肉体を二人宛手分けして岸に引上げ、水を吐かせ、種々と人工呼吸を施した末、常楠は老人の鐵嗄れ聲を張り上げ乍ら、反魂歌を繰返し〳〵高唱した。國依別は漸くにして手足を動かし出した。常楠の面は忽ち輝き初めた。又もや二人に向つて反魂歌の數歌を唱へ上げるや、漸くにして二人も蘇生した。一同の悅びは譬ふるに物なきまでゞあつた。

常楠の命令に依つて國依別其他を天然ホテルの槻木の洞穴に送り、土人に介抱させ置き乍ら常楠は時遲れては一大事と、疲れた老の足を引ずり乍ら、多羅の木の杖を力にハーリス山の谷間を目がけて再び登り行く。

國依別、チャール、ベースの三人は漸く元氣恢復した。されど龍神の柿を食つた天罰か、腹は迫々膨脹して臨月の女の樣になつて來た。チャール、ベースの二人は、ゴロ〳〵と身体中丸くなつて毬のやうに轉げ廻り苦しみ乍ら

チャール「モシ〳〵、國依別神樣、何とかして下さいな」

國依「マア待つて呉れ。俺の腹から癒さなくちやならないのだ」

チャール「元は貴方の爲に、斯んな目に會つたのですから、助けて頂かねばつまりませぬ。何だか腹の中に大蛇の兒がウヨ〳〵して居るやうに苦しくて怺りませぬワ。大蛇の赤兒が出産するや否や、男女の區別なく即座に死んで了ふと言ふことです。これ丈け苦しくては死んだ方が優だが、死んでもつまらない。宅には女房や子が殘つてゐる。何とかして早く助けて貰はねば、迫々苦しくなつて來ました」

國依別「いやしさに世間へ恥をかきの實の
　　腹ふくれても大蛇あるまい」

と二度くり返し口吟み、自分の腹を拳骨を固めて三つ四つ撲りつけ

國依別「大蛇、退散々々」

と云ひ了つて、天の數歌を力限りに苦しき息をつき乍ら奏上した。不思議や今迄脹滿のやうにふくれてゐた國依別の腹部は、元の如くに癒り、息も平常の通りになつて來た。國依別は直ちに天津祝詞を奏上し、感謝祈願の言葉を唱へて神恩を涙乍らに感謝するのであつた。

チャール、ベースの二人は、斷末魔の樣な聲を出して、ウン〳〵と肩で息をし乍ら呻いてゐる。その慘狀目も當てられぬ許りであつた。

國依別は兩人の爲に一生懸命に汗水を垂らして感謝祈願をしてゐる。

國依別『龍神の柿食て布袋になつチャール、
腹は忽ちヘースなるらん。
柿とつて見ればヘースが當りまへ
腹ふくれチャール道理わからぬ。
チャール、ヘース、國依別も諸共に
天のはらから下りけるかな。
ヘラ〳〵と涙流してはらを撫で
柿を盗んだ腹いせに逢ひ。
腹が立てども仕方なし
龍神腹を立てたのか
汝は横に長い奴
腹立通しもならうまい
高天原にあれませる百の神たち
大海原にあれませる速秋津姫神
はらの惱みを祓ひ玉へ清め玉へ
ヘラ〳〵と降り來る雨に空晴れて
大蛇の空も澄み渡りけり』

と口から出任せの腰折れ歌を詠ひ乍ら、チャール、ベースの眞ん中にチョコナンと坐り、兩人の布袋腹を兩方の手で撫で廻して居る。薄紙を剝いだ樣に二人の腹は漸次容

積を減じて來た。

國依別『それ見たか女房が撫でるふくの腹

オットドッコイ

それ見たか國依なでる柿つばら

天津神國津神はらひ玉へ清め玉へ

高山の伊保理、短山の伊保理

かき分けて聞召めせよ

これが盲の柿のぞき

節季が來たぞ〳〵

かき出せ〳〵

四月と二月の死際ではないぞ

今が二人の生命の瀬戸際

萬劫末代生き通し

皇大神の守る身は

假令大蛇の潜むとも

大蛇あるまい二人連れ

あゝ惟神〳〵々々

御靈幸はひまし〳〵て

チヤール、ベースが苦しみを

片時も早く救はせ玉へ

その源を尋ぬれば
國依別より出でし事
罪は全く我身にあれば
何卒早く兩人の腹をひすぼらせ舊の元氣に恢復せしめ玉へ、
あゝ惟神靈幸倍坐世」

と一生懸命に汗みどろになつて祈念し乍ら兩手にて、兩人の腹を撫で下ろした。神德忽ち現はれ、二人は半時餘りの間に元の如くになつて了つた。四五の供人も國依別の祈願に依つて忽ち全快せし事を感歎し、各口を揃へて

「國依別の生神樣」

と合掌するのであつた。

國依別は大神にチヤール、ベースと共に感謝の祝詞を奏し了り、足を早めて再びハーリス山指して登り行く。國依別は道々宣傳歌を歌ひ乍ら元氣旺盛八人連れにて、言依別の登りたる場所を辿り進み行く。

國依別「朝日は照るとも曇るとも　月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも　誠の力は世を救ふ
神の御稜威は目の當り　わが改心と言靈の
力に依りて三柱の　尊き御子は救はれぬ
あゝ惟神々々　御靈幸はひましまして
一時も早く片時も　言依別や若彦の
神の命の御前に　導き玉へハーリスの

山を守らす高津神
旭日に見直し聞直し
恵みを感謝し奉る
定めて吾等が進退を
完全に詳細に宜り終へて
森の木霊に響くらん
老木林の谷の道
名は太平の柿なれど
太亂柿と名をつけて
此柿許りは食はぬ様に
不知不識の過ちを
助け玉ひし龍神の
常楠翁は今何處
言依別の御前に
今は三人の笑ひ草
天を封じて聳り立つ
進む吾等の涼しさよ
亂痴奇騒ぎの此始末
以後の戒め何人も
標を立て、置かうかな

いや待て暫し待て暫し
食てはならぬと里人が
私の様なる周章者
必ず住んで居らうまい
肝腎要の神業に
聖地へ歸り玉照彦の
瑞の命の御前に
國依別も今日よりは
茶目式からかい薩張と
天然ホテルの入口で
太平柿は古より
よつく承知の上なれば
よもや一人も此島に
そんな事して暇を取り
ガラリ外れて了ふたら
嚴の命や玉照姫の
どうして言ひ譯立つものか
心の底から立直し
止めて眞面目になりませう
若彦、常楠兩人に

向つて茶目式發揮なし
化けた女神と僞つて
俄にこんな失敗を
あゝ後れしか〳〵
神の司や若彦が
人は見かけによらぬもの
立涙な奴ぢやと思ふたに
谷に落ちこみ他の手に
神の司と云ひ乍ら
チャール、ベースの兩人に
ハーリス山の龍神の
悅に入つたるその罰で
神から言ひつけられたのだ
嘸今頃は言依別の
常楠さんと諸共に
國依別の宣傳使
神の禁じた柿を喰ひ
かゝつて救はれ何の態
有名無實のタワケ者
決して罪はない程に
口の賤しい國依の
あれ丈苦い目に會ふた
ヤッと安心したものゝ
國依別は神勅を
喰つたのなれば何うならうと
二人の奴を助けたい
首を鳩めてひそ〳〵と
あゝ惟神々々
空中飛行の曲藝を
お蔭で生命に別條なく
いゝがが分らぬその爲に
常楠さんの報告で
可哀想なは兩人ぢや
叛いて神の冥罰を
假令死んでも構はない
なぞと今頃三人は
小田原評定の最中だろ
御靈の幸を蒙りて
うまく演じた吾々は
シャン〳〵こゝ迄やつて來た

言依別や若彦も　よもやこれ丈達者ぞと
思ひ初めては居られまい　其處へヌックリ顔出せば
死んだ我子が我家に　笑つて皈つて來たやうに
悅び勇んで吳れるだろ　オツトドツコイ言ひ過ぎた
又茶目式になりかけた　直日に見直し聞直し
宣り直しませ天津神　國津御神の御前に
國依別が生命を　助けられたる嬉しさに
感謝の歌を奉る　手の舞ひ足の踏むところ
知らずと云ふは此事か　餘り嬉しうて持前の
茶目が出て來て脫線し　不都合な事を云ひました

幾重にも御詫申します　朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも　假令大地は沈むとも
今度の事に懲々し　毛筋の巾の横幅も
反かず神の御教を　必ず守り奉る
あゝ惟神々々　御靈幸はひましませよ」
と元氣に任せて聲高らかに歌ひ乍ら、足並揃へて奥へ〳〵と進み行く。

（大正一一、七、二五、於六、二、外山豊二錄）

瑞　月

國魂の神の神德に人草の心の色も濃き薄きあり
心のみ誠の道にかなふとも おこなひせずば神は守らじ
益良夫が言ひ交はしたる言の葉は幾世經ぬとも變らざらまし

第四篇　龍神昇天（一四一）

第一二章　湖上の怪物（七九四）

言依別は若彦と共に、途中に國依別の身に對し、斯かる變事ありとは夢にも知らず一心不亂に神言を奏上し乍ら、千疊敷の岩石、彼方此方に伍列する谷間に、漸く辿り着き、目を放てば紺碧の淵、際限もなく山と山との谷間に押し擴がり、風も無きに波高く立ち騒いで居る。一見して實に凄慘の氣に襲はるゝ如くである。言依別は後振り返り

言依「若彦さん、ここは琉と球との寶玉を持つて居る龍神の棲處でせう」

若彦「ハイ左樣で御座います。今日は大變に浪が荒れて居ります。屹度途中に於て國依別、常楠が、何か神慮に叶はぬ事を行つたのではあるまいかと、氣に掛つてなりま

せぬ。……アレ〳〵御覽なさいませ。此無風地帶に浪は增々荒くなつて來たではありませぬか。アレ〳〵山の如き波が立つて來ました」

言依「成程、此湖水は餘程趣きが違つて居ります。此波の立つ樣子から考へても、貴き龍神が潛伏して居られるのは明かであります。併し乍ら國依別や常楠其他の方々は、どうなつたのでせうか。大變に遲いぢやありませぬか」

若彥「途中に於て、龍神の守護すると云ふ太平柿が、枝もたわゝに實のつて居りましたが、大方彼の柿でも國依別さんが取つて喰ひ、龍神の怒りに觸れて、一驚動をオツ始めて居るのではありますまいかと氣が氣でなりませぬ」

言依「あの男は茶目式で、揶揄專門より外に藝能のない男だ。然し淡白で正直で面白い奴だから、人の恐れる柿を取つて見やうなぞと、痩我慢を出したのかも知れませぬよ。常楠翁は實に眞面目な人だから、矢張國依別の巧い口に乘せられて、犧牲を喰つて居るのでせう。何は兎もあれ一同無事な樣に此處で祈願を致しませう」

と兩手を合せ、湖面に向つて兩人は天津祝詞を奏上し、天の數歌を唱ひ上げて稍時を費やした。

木の間を漏れて笠が搖ついて來る。よく〳〵見れば常楠は只一人、息せききつて登り來り、二人の前に手を突いて

常楠「ドウも御待せ致しました。嘸御退屈で居らせられたでせう。これには少し譯が御座いますので、ツヒ時間を潰しました。どうぞ御赦しを願ひたう御座ります」

言依「大方國依別が、龍神の柿を採つて喰つたのぢやありませぬか」

常楠「ハイ其爲めに大變な珍事突發致し、イヤもう氣を揉みましたが、稍安心する事が

出來ましたので、取るものも取り敢ず、此處迄急いで登つて參りました」

と息をつぎ〳〵苦しさうに物語る。言依別は膝を進め猶も次から次へと、詳細に尋ねた。常楠は有りし事ども一切包まず隱さず物語つた。

三人は又もや國依別の無事を祝し、再び感謝祈願の祝詞を奏上しつゝあつた。其處へ以前の歌を謠ひ乍ら、意氣揚々として國依別は、チャール、ベース外五人を引き連れ、三人の前に現はれ、頭を掻き乍ら

國依「イヤどうも　長らく御待たせ申して申譯が御座いませぬ。樣子は殘らず常楠翁から御聞取の事と存じますれば、何も申上げませぬ。これにて私も副守護神の茶目坊が悉皆退散致しまして、本當に眞摯な、率直な、清廉な、潔白な、勇壯活潑な人物に生れ代りました」

若彦「アハヽヽヽ、國依別さん、茶目坊は……增々猛烈なつたぢやありませぬか」

國依「燈火の滅せんとするや其光殊に强し……とか云つて、副守の奴、今や滅亡の斷末魔の悲痛の叫びで御座います。實に悲痛こい守護神で、國依別も誠に迷惑千萬。チャール、ベースの兩人も、鰒の如くに腹膨れ、臨月の女房が三つ兒腹を抱へた樣な体裁、ウン〳〵キャア〳〵と唸り通し、揚句にや肥癖搔いて、おまけに癇癪で、陰囊たむしで……」

若彦「國依別さん、又脫線しましたぞ。好い加減に茶目坊を追ひ出しなさらぬか」

國依「何程チャール、ベース坊を追ひ出さうと思ふても、私に引付いて生命の親ぢやと思ふて、副守が放れぬのですから仕方がありませぬ……なア、チャール、ベース、若彦さまの仰有る通り、モウ私の副守護神になる必要はないから、トツトと離れて

下さい」

常楠「オホ、、、、何とまア、戰場に臨んで氣樂な事を言ふて居る方だ事」

國依「强敵を前に控へて横笛を吹き、悠揚迫らざる其態度、これで無くては本當の言靈戰に參加し、大勝利を贏ち得る事は不可能でせう。アハ、、、」

此時一陣の暴風水面より吹き起り、巨大なる岩石迄空中に卷き上げる勢となつて來た。「コリヤ大變」と國依別は、大木の幹に抱付き、一生懸命に聲迄震はせて祈念して居る。何故か言依別、若彦、常楠其他一同は、さしもの暴風に裾さへも吹かれず依然として其場に端坐して居た。

言依「國依別さん、强敵を前に控へて、餘裕綽々たる貴下の態度、實に感じ入りました」

若彦可笑しさを堪へて「キユリ〳〵〳〵ブー」と吹き出して居る。常楠は苦笑顏をして控へて居る。

國依「綽々として根つから餘裕は有りませぬ。神直日、大直日に見直し聞直して下さいませ。どうぞ此烈風を止まるやうに御祈念し上下さい。あのやうな大岩石が頭上に落下しやうものなら、それこそ五体は微塵になりませう。何だか体軀の筋肉が却密に活動し初めました」

若彦「國依別さん、何處に烈風が吹いて居りますか。少し風が欲しい位だ。餘り暑いからなア……貴下の目には風が吹くやうに見えますか」

國依「アアどうしても……コリヤ……私はどうかして居るわい。ほんに矢張風は吹いて居りませぬなア。大方過去か未來の烈風の慘狀が時間空間を超越して、私の目

に映つたのでせう」

若彦「何處迄も徹底した何々ですな、アハ、、、」

と笑ふ。

言依別命は嚴然として

言依「サア、國依別さん、是からが正念場だ。今晩は此谷間の湖水を眺めて祈願を凝らし、龍神の寶玉を受取らねばならない、大切な用でありますぞ。是限り眞面目になつて善言美詞の一點張り、氣を付けなされませ」

國依「ハイ」

と淑やかに夢から覺めたる如く、兩手を突き眞面目くさつて、頭を下げて居る。一同は三間許り距離を隔てゝ、谷川の湖邊に伍列する岩影に身を忍ばせ、暗祈默禱し乍ら時の移るを待つ事とした。

夜は迫々と更けて來る。西から東から延長した、山と山との谷間は、二十三夜の利鎌の樣な月、漸く雲を押し分けて昇つて來た。一同は月光に向つて祈願を凝らし居る際、礫の雨、まばらにバラ〳〵と石を撒くやうに降つて來た。湖面を見れば幾つともなく、水鉢を並べた樣に水面に凹みを印し、聞き波紋は互に重なり〳〵て、時計の蓋の生地の樣に見ゆて來た。暫くにして大粒の雨は止まつた。湖底に得も言はれぬ凝々たる火柱の如きもの横たはり輝き初めた。一同は聲を潜めて、此光景を見守つて居る。微妙の音樂に引かへ、四邊の谷々山々より何とも云へぬ殺風景な怪音が一時に響いて來た。大地は唸りを立てゝ震動し、一同の體迄がビリ〳〵と響き出した。忽ち四邊は暗澹として咫尺を辨ぜざるに立至つた。

其時忽然として波の上を歩み乍ら、此方に向つて進み來る白色の長大なる怪物がある。近づくに從つてよく〳〵見れば、頭髪鮑迄白く背後に垂れ、髯は臍の邊まで垂らし、顏は紅の如く目は鏡の如く、金色燦然たる二本の角四五寸許りのもの、額の左右に行儀よく並立し、耳迄引裂けたる鰐口に金色の牙を剝き出し、何とも言へぬ妙な石

厚美鐘聲で

怪物「我こそはハートリス山の龍神、大龍別命、大龍姫命の一の眷屬、龍若彦神であるぞよ。其方事聖地に於て、玉照彦、玉照姫命より神命を奉じ、琉、球の寶玉を大龍別命、大龍姫命より受取らんと、遙々此處に來れる事、大神樣に於て、止むを得ずとして、御滿足遊ばして御座る。併し乍ら言依別命の幕下に仕ふる、國依別命、龍神の柿を盜み喰ひし其爲めに、我眷屬共大に立腹致し、斯かる天地の道理を辨へざる家來を持つ言依別に渡す事は、一つ考へねばならぬと大變な大評定で御座る。も一度聖地へ歸り、出直して修行を一から行り替へ、改めて二つの寶玉を御迎ひに參つたがよからうぞ」

若彦「それ見よ、國依別さん、お前一人で皆の者が總崩れになつたぢやないか。それだから一匹の馬が狂へば千匹の馬が狂ふと云ふのだ」

國依「入釜敷う云うな。俺が龍若彦に直接談判をやつて、見ん事受取つて歸る。……コう〳〵龍若彦さやら、汝は三五教の宣傳使に向つて、禮儀を知らず不屈きな奴だ。種々と化樣もあらうに、其方の失敬千萬なる顏は一体何だ。人に對する時は最も美はしき顏色を以て、笑顏を十二分に湛へ、挨拶するが神の禮儀なるに、鬼面人を驚かすと云ふ、其方の遣り方、國依別中々承知仕らぬぞ。これに返答有らば、承

はらう。……又龍神の柿を採り喰ひしを、汝は非常に罪惡の如く今申したが、彼の柿なるもの、龍神の平素食す可きものなるや返答問かう。柿は人間の喰うべきもの、人間に次いでは猿、鳥の食す可き物だ。人にも喰はさず、棚にも置かず、あたら天與の珍味を毎年木に腐らし、天惠を無視する大逆無道、國依別……サアこれより言靈の神力を以て、汝等は申すに及ばず、大龍別命、大龍姫命を言向け和し、天晴、琉、球の玉を奉らせ吳れん。此方の言に向つて一言の辯解あるか……一二三四五六七八九十百千萬……」

と國依別は自暴自棄になり、背水の陣を張つて力限りに言靈を奏上した。龍若彦命と稱する怪物は、次第々々に容積を減じ、遂には豆の如くになつて消ねて了つた。國依別は

國依「アハ、、、、コレ若彦さん、御心配御無用になされませ。これより國依別、飽迄も言靈を以て奮戰し、目的の琉、球の寶玉を受取つて見せませう。最早吾々に渡す可き時機が到來したのだ。さうでなくては大神の直司なる、玉照彦樣、玉照姫樣が何しに教主に御命令あるものか。此龍神執着心未だ晴れやらず、小さき事にかこ付けて、すつた揉んだと一日なりとも永く手に持たんと、吝嗇な奴根性から申して居るのである。……ヤア〳〵湖底にある龍神、よつく聞け。三五教の神の司言依別命、國依別命、若彦、常楠の四魂揃ふて玉受取りに向ふたり。時節には叶ふまい。速かに我前に持來り目出度授受を終れッ」

と大喝した。此時の國依別の顏面は、四邊を射るが如く崇高なる權威に、何處となく充されて居つた。

（大正一一、七、二五、蒼六、二、谷村眞友錄）

瑞月

雷鳴も遠きに避けぬ言靈の天照る神の聲の發威に
心をも身をも任せて祈りなば神のまことの力賜はむ
身はよしや虎伏す野邊に果つるとも御國の爲に命惜しまず

第一三章　龍の解脫（七九五）

太海中に浮びたる
玉の瀧みし神の島
一度に開く時來り
太敷立て、千木高く
瑞の御靈の神勅を
完全に詳細に受け給ひ
言依別に言依さし
珍の寶を索めんと

巖も高き琉球の
三千世界の梅の花
綾の聖地に宮柱
鎮まりゐます畏御靈
玉照神の二柱
瑞の御靈の御裔なる
潮滿玉や潮干の
教主自ら言依別の

敎の司を引き率れて
漸う此處に來て見れば
若彦始め常楠が
正しく受けて逸早く
天を封じて立ち並ぶ
勝れて太き槻の幹
若彦、常楠兩人は
島人等を大神の
時の來るを待つ間に
瑞の命の大敎主
浪路を遥に乘り渡り
我より前に紀の國の
又もや神の御勅宣
來り居ませる尊さよ
樛や楠の森林に
天然自然の洞穴に
木俣の神と現はれて
稜威に言向け和しつゝ
言靈清き言依別の
國依別と諸共に

來りましたる嬉しさに
ハーリス山の山奥に
鞭撻ち進む谷の奥
四邊は闇に包まれて
物凄じき折もあれ
波上を歩み進み來る
髪蓬々と胸に垂れ
長く背後に垂れ下り
朱を濯ぎし顏の色
黄金の色の牙を剝き
若彦、常楠勇み立ち
心も勇む膝栗毛
湖水の前に着きにける。
礫の雨は降りしきり
闇の帳を引き開けて
怪しの影を曉むれば
雪を欺く白髪は
眼は鏡の如光り
耳迄裂けた鰐口に
四五寸許り金色の

角を額に立て乍ら
怪しき舌をニヨッと出し
向つて此言を言ひ掛ける
守ると聞らし太平柿
盗んで食つたが罪なりと
力限りに罵倒して
渡はじものと縄を張る
手も無く切つて呉れんずと
國依別が言霊の
流石の魔神も辟易し
ガラ〳〵拳を張りあげて
言依別の一行に
叱言の終は龍神の
國依別が畏くも
執着心の鬼神が
琉と球との寶玉を
魔神の張りし蜘蛛網
磊落不羈の神司
打ち出す誠の砲撃に
おひ〳〵姿を隠し

豆の如くになり果て、
コヤ、雑神々々
金剛不壊の如意寶珠
秘め隠したる言霊の
我は正義の鉾とりて
高天原の神の國
大海原の底までも
國依別の言霊は
小戸の青木ケ原と鳴る
珍の伊吹になりませる
遂にあらなく消にける。
御霊幸はひまし〳〵て
國依別が丹田に
力だ乃向ふ橋はなし
天地の神の大道を
豊葦原の瑞穂國
照らし渡さにや置くべきか
筑紫の日向の橘の
神伊邪那岐大神が
禊戸四柱大御神

瀬織津姫や伊吹戸主
速秋津姫神
此處に四柱宣傳使
なりて現はれ來りけり
珍の命の龍神よ
助くる國ぞ生げる國
天の岩戸の開け放れ
澄み照り渡る今の世に
二つの珠を何時までも
此世を救ふ瑞御靈

珍の大神始めとし
速佐須良姫神
此神等の生宮と
大龍別や大龍姫の
是の天地は言靈の
幸はひゐます國なるぞ
根底の國も明かに
潮滿珠や潮干の
抱きて何の益かある
神の任しの兩人に

惜まず隠さず畏々と
はや献れ惟神
假令千尋の水底に
三五教の我々が
只一時も一息も
ア、惟神々々
一、二、三、四、五、六
百、千、萬の神人を
堅磐常磐に守らんと
諸なひ給へ逸早く」

汝が姿を現はして
神は我等と倶にあり
何時迄包み隠すとも
此處に現はれ來し上は
躊躇ひ給ふ事勿れ
御靈幸ひましませよ
七、八、九、十たらり
浦安國の心安く
神の任しの此旅路
早く〳〵と宣りつれば

今迄包みし黒雲は
遠を照らして一團の
行む前に近つきて
尊き女神と相現じ
言依別や國依別の
地より湧き出る玉手箱
捧げて二人に献り
忽ち起る紫の
大空高く天の原
執着心の深かりし
西邊限なく晴れ渡り
火光は徐々二人が
忽ち變る二柱
滿面笑を含みつゝ
二人の前に手を束ね
各一個を兩の手に
綾羅の袖を靡し
雲に乘じて久方の
日の稚宮に登り行く
大龍別や大龍姫の

珍の命の兩神も
三寒三熱苦行を終へ
茲に尊き天津神
坐まして清き神國の
實にも尊き物語
陰暦六月第二日
團扇片手に拍子とり
筆執る人は北村氏
三五教の御教の
喜びなりと記し置く
愈々茲に三千年の
神の恵みに救はれて
皇大神の御右に
常世の春に會び給ふ
語るも嬉し今日の宵
松雲閣に横臥して
さも諄々と述べて置く
神の稜威も隆光る
栞となれば望外の
アヽ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

國依別の言靈に龍若彦と稱する怪物は忽ち雲散霧消し、再び現はれ來る大龍別、大龍姫は各手に琉、球の玉を納めたる玉手箱を、言依別、國依別の手に恭しく捧げ三千年の三寒三熱の苦行を茲に終了し、一切の執着を去つて、悠々として紫の雲に乘り、天津日の稚宮に上り、大神の右に座し、天の水分神となつて降雨を調節し給ふ大神と成らせ給ふたのである。

清き正しき言靈は一名金剛不壞の如意寶珠とも言ふ。此天地は言靈の幸はひ助け、生き働く國である。宇宙間に於て最も貴重なる寶は聲あつて形なく、無にして有、有にして無、活殺自由自在の活用ある七十五聲の言靈のみである。之を靈的に稱ふる時は即ち金剛不壞の如意寶珠となる。天照大御神の御神勅に「言向け和せ・宜り直せ」とあり、之は神典古事記に明かに示されてある。天の下四方の國を治め給ふは五百津美須麻琉の玉にして、此玉の活働く時は天ケ下に饑饉もなく、病災も無く戰爭も無し又風難、水難、火難を始め、地異天變の虞なく、宇宙一切平安無事に治まるものである。

又、今此處に言依別、國依別の二柱の龍神より受取りたる琉、球の二寶は、風雨水火を調節し、一切の萬有を攝受し或は折伏し、よく攝取不捨の神業を完成するの神器である。

こゝに言依別命を始め、一同は湖水に向つて天津祝詞を奏上し、天の數歌を謠ひ上げ宣傳歌を謠ひ乍ら、心地よゆに元來し道を下りつゝ、槻の洞穴に一先づ歸る事となつた。

言依別の一行は　　龍の湖水を後にして
千疊岩の莽列せる　　奇壁絶景縹ひ乍ら
足に任せて降り行く　　登りに引き替へ下り坂
思ふたよりも速かに　　何時の間にかは龍神の
守り居たると傳へたる　　太平柿の邊まで
歸り來れば常楠は　　フト立ち留り一行を
顧み乍ら「教主さん　　國依別　神さんが
大蛇の群に襲はれて　　太平柿の頂上より
身を躍らして青淵に　　ザンブと許り飛び下り
假死狀態となり果て、　　渦に捲かれて流れたる

改心紀念の靈場そ　　負ぬ氣强い國依別の
神の司は反對に　　龍右彦に逆理者
いとも立派に喰はして　　叫ませ給ひし健氣さよ
ア、　維神　々々　　斯うなる上は常楠も
神の心が分らない　　善惡正邪の標準を
如何して分げたら宜からうか　　お裁き願む」と宜りつれば
言依別は打ち笑ひ　　「國依別の言靈は
天地の道理に適ひたり　　善に墮すれば惡となり
惡の浄みは善となる　　善惡同体、此眞理
胸に手を當てつら〳〵と　　直日に見直ひ聞直ひ

人の小さき智慧もちて
分らう道理のあるべきや
心に適ひし事ならば
其御心に適はねば
人の身として同胞を
奥へられない人の身は
任せ奉るに如くはない」
國依別や若彦も
心欣々一行は
楠と槻との森林に
善惡正邪の標準が
此世を造りし大神の
何れも自然の道となり
即ち惡の道となる
裁く權利は寸毫も
只何事も神の手に
いと細やかに說きつれば
常楠翁も勇み立ち
黃昏過ぐる宵の口
極めて廣き天然の
ホテルにこそは歸りけり
御靈幸はひましませよ。

ア、惟神々々

（大正一一、七、二五、舊六、二、北村隆光錄）

第一四章　草　枕（七九六）

雲に聳ゆる比治山の
豐國姫の永遠に
朝な夕なに仕へたる
身魂もすぐれて清子姫
三五教の宣傳使
初稚姫や玉能姫
海洋萬里の波の上
一つ島なる諏訪の湖
麓に清き比沼眞奈井
鎭まりゐます聖場に
心の色の照子姫
神の御言を蒙りて
梅子の姫を始めとし
玉治別の一行が
永久に浮べる龍宮の
麻邇の寶珠を永久に

守り玉ひし玉依姫の
手づから受けて八咫烏
大空高く翔めぐり
天の岩戸も秋山彥の
常磐の松の茂り生ふ
二人の女神は大神に
鎭魂なす里を越ゆ
行手の道も長善寺
神の宮津に着きにけり
右に拜してスタ〳〵と

神の命の御手より
黃金の翼に跨りて
十重に二十重に包みたる
人子の司の珍敵
御苑に降りますと聞き
許しをうけて久次の
四方の峰山紅葉して
大野、山田を乘り越ゆ
天津御神の神宮を
岩淵、文殊、紅葉坂

荒波たける磯端を
秋山彦の門前に
後の祭か十日菊
綾の聖地に安々と
二人の女神は氣を焦ち
田舍を過ぎて田邊宿
池の内をば乘り越ゑて
日蔭も見ゑぬ眞倉郷
心も開く梅迫や
綾の大橋打渡り

由良の港に辿りつき
佇み樣子を伺へば
麻遲の寶珠は逸早く
着かせ玉ひしと聞くよりも
月の顏丸八江の
日はまだ空に餘の内
山と山との谷間の
片方の上杉月照りて
西入田、緣垣、味方原
小雲の流れに心膽を

洗ひて進む聖域に
十曜の神紋キラ〳〵と
繪にもかかれぬ美はしさ
木々を染なす綾の里
やう〳〵辿りて伏し拜み
二柱神の御前に
再度請へば言依別の
言葉靜かに宜らすやう
一日も早く立出でゝ
浪かき分けて琉球の

太しき建てる神館
月の光に反射して
秋は漸く深くして
錦の宮の御前に
玉照彦や玉照姫の
現はれ出でゝ神勅を
瑞の命の口を借り
汝はこれより聖地をば
南に向ひ瀨戸の海
神の御島に渡れよと

宜らせ玉ひし言の葉を
錦の宮を伏し拜み
山路を驅り鷹栖や
細谷路を辿りつつ
渡りて進む和知、本庄
尋ね行くのは殿田川
其行先は千妻や
小山、松原後にして
道も廣瀬や八木の町
大川小川を打渡り

畏み奉り二人連れ
小雲の流れを溯り
山家、音無瀬、才原の
流れも廣瀬の丸木橋
中山、新田、胡麻の郷
乘せて嬉しき船岡の
曾我谷、園部の花の里
羽はなけれど鳥羽の驛
深き川關、千代川の
神の御稜威も大井村

天田神德嬉しみて
穴太の山の奥深く
あゝ惟神々々
朝日の直刺す神の山
三つ葉躑躅の其下に
黄金の雞の曉を
折柄吹來る秋風に
微妙の音樂奏でつつ
あちらこちらに山柿の
玉照彥の御姿を

玉照彥の生れませる
高熊さして登りゆく
御靈幸はひましませよ。
夕日の日照らす神の峰
小判千兩埋けおいた
告ぐる神代を松林
木々の梢は自ら
小鳥の歌ふ聲清く
赤き顏してブラ〳〵と
今見る如き照子姫

神の寶座も清子姫
木花姫の神勅を
秋の夜長に細々と
深き御德を拜しつつ
スタ〳〵降る山の神
又もや身魂を洗ひつつ
松の大木の大空を
息急き登る雄々しさよ
頭上に浴びて六箇谷
崎嶇たる山路分け乍ら
岩窟の中に忍び入り
三七二十一日の
敎へ諭され兩人は
山を降りて谷路を
水音高き瀧の邊に
來勿止神に送られて
封じて暗き堺山
三五の月の光をば
犬飼、法貴、湯屋ケ谷
止止呂美坂や細の川

又もや渡る中河原
思ひも深き池田郷
足や伊丹の郷こゑて
秋の芒に傷つけて
日は早空に西の宮
朝日と共に打出て
無事に進むは大神の
生田の森に名も高き
玉能の姫の神館
心も勇む駒彦に
太部の里をば打過ぎて
神田草鞋も桑津村
稻野、常吉向う脛
屢休む柴野村
茲に一夜を宿りつつ
葦尾痛めん憂もなく
まさしく本庄、御影町
稚姫君の祀りたる
一夜を爰に明かしつつ
いと親切に歡待なされ

兵庫の港に進み行く
代價を吳れて買ひ取りつ
波高砂の浦を越ね
左手に眺めて豐の島
進む折しも暗礁に
如何はせんと村肝の
月照る波を分け乍ら
一つの船に助けられ
危き所を救はれて
石松茂る磯端に

濱邊に繫ぎし新船を
誠明石の海の面
家島、西島、小豆島
兒島半島のそば近く
船乘りあけて兩人は
心を苦しむ折柄に
此方に向つて來る
茲に二人の姫神は
神のまに〳〵龍宮の
船を繫ぎて上陸し

奪の實る山路を
常補翁の住家なる
天然ホテルに着きにけり。

一行四人の男女連れ
目出度き人に大槻の

（大正一一、七、二七、舊六、四、松村眞澄錄）

第一五章　情意投合（七九七）

虹、蜂の兩人は生田の森に立寄り、駒彦に面會して、言依別の敎主が國依別と共に高砂の島に神務を帶び、急遽聖地を立ちて出發せられ、瀨戸の海を、西南指して行かれたりと云ふ消息を、例の高姫が聞きつけ、春彦、常彦の一行三人、言依別の後を追ひしと聞きしより、茲に虹、蜂の二人は、取る物も取敢ず、一隻の輕舟に身を任せ、高姫が敎主に對し、如何なる妨害を加ふるやも計り難しと、一生懸命に高姫の後を尋ねて漕ぎ出し、兒島半島の沿岸に差かかる時、暗礁に乘り上げたる一隻の船を見付け、何人ならんと星の光に透かし見れば、比沼の眞奈井の寶座に仕へ居たる、清子姫、照子姫の二人であつた。

茲に二人を我舟に救ひ上げ、半破れし其舟を見棄て、荒波を勢よく漕ぎつけて、漸く琉球の那覇の港に安着し、一行四人は何者にか引かるる樣な心地して、其日の夕べ頃、常楠、若彦兩人が一時の住居となしたる槻の木の洞窟の前に辿りついた。

虹公は既に言依別命より清彦と云ふ名を賜り、蜂公は照彦と云ふ名を賜つて、准官憲使の職に就いて居たのである。二人は思ひ掛なく言依別命に拔擢されたのを、此上なく打喜び、其師恩に酬ゐん爲、言依別命に對しては、如何なる苦勞も、假令身命を拋つも惜まざるの決心をきめて居たのであつた。

當の目的物たる高姫一行を、海上にて見失ひたれ共、照子姫、清子姫の遭難を救ひたるは、全く神の御攝理として稍滿足の體であつた。

此照子姫、清子姫は其祖先は行成彦命であつて、四代目の孫に當つて居る。神勅

を受けて、比沼眞奈井に豐國姫出現に先立つて現はれ、比治山に草庵を結び、時を待つて居たのである。そこへウラナイ教の黒姫に出會し、いろ〳〵とウラナイ教の教理を說き聞かされ、半之れを信じ、半之を疑ひ、何程黒姫が辯舌を以て說きつくる共、清子姫　照子姫は魔窟ケ原の黒姫が館には一回も足をむけず、又高姫なぞにも會はなかつた。只黒姫の言葉を反駁もせず、善惡を取捨して表面服從して居たのみであつた。此二女の黒姫に對する態度は、其時の勢上已むを得ず、之れ以上最善の態度を執ることが出來なかつたのである。

時に豐國姫命の神勅、此二人に降り、諏訪の湖の玉依姫より麻邇寶珠を受取り、梅子姫其他一行が、由良の港の秋山彥が館に歸り來り、神素盞嗚大神、國武彥命の出でますと聞きて、二人は旅裝を整へ、由良の港の秋山彥の館に出で來りし頃は、最早麻邇寶珠は聖地に送られ、神素盞嗚大神、國武彥命の御行方も分らなくなつた後の祭りであつたから、二人は時を移さず、陸路聖地に向ひ、錦の宮の玉照彥、玉照姫の神司に謁し、琉球の島に渡るべく、再び聖地を立ちて、玉照彥命の出現地なる高熊山に立寵もり、三週間の改めて修業をなし、木花姫の神教を蒙りて、意氣揚々と山坂を越ゑ、生田の森に立寄り、それより兵庫の港を船出して、琉球に向はんとし、神の仕組か、思はずも兒島半島の手前に於て暗礁に乘りあげ、危險極まる所へ、三五教の新宣傳使、清彥、照彥の舟に助けられ、漸く那覇港に四人連れ安着し、槻の洞穴の前迄進んで來たのである。

四人の男女は小さき船にて長途の航海をなす間、何時とはなしに意氣投合し、互に意中の人を心に深く定めて居た。清子姫は清彥に、照子姫は照彥に望みを囑して居た

然るに清彦は又照子姫に、照彦は清子姫に望みを囑し、將來夫婦となつて帥業に參加し度く思つて居たのである。清彦は四十四五才、照彦は四十二三才の元氣盛り、清子姫は二十五才、照子姫は二十三才になつて居た。年齢に於て二十年計り達つて居る。されど神德を蒙りて誠の道を悟りたる清彦、照彦は、全身爽快の氣分漲り、血色もよく比較的若く見ゑ、夫婦として一見餘り不釣合の樣にも見ゑなかつたのである。

四人は一夜を茲に明かさんと、洞穴の奥深く進んだ。サヤ〳〵した葦莚の疊、土間に敷きつめられ、食器など行儀よく並べられてあつた。

清彦「あゝこれは何人の住家か知らぬが、穴居人種の多い此島に、木株のこんな天然の舘があるとは、大したものだ。何でもこれは此邊りの酋長の住家か分らないぞ。斯樣な所にうつかりと安眠して居る所へ、澤山の眷族を連れ、歸り來つて立腹でもせうものなら、どんな事が突發するか知れたものだない。入口は一方、グツ〳〵して居ると、德利攻めに會うて苦しまねばならぬ。コリヤ一人宛、互に入口に立番をし、もしも怪しき奴がやつて來たら合圖をすると云ふ事にせうかなア」

照彦「それもそうだ。併し乍ら先づ路々むしつて來た此の奪を夕食に濟ませ、其上の事にしても餘り遲くはあるまい。そろ〳〵そこらが暗くなつて來たようだ」

と懷より火燧を取出し、そこらに積み重ねたる肥松の割木に火をつけ明りを點じ、夕食を喫し、家へ歸つた樣な氣分になつて、四人は奥の方に安座し、種々と感想談に耽つて居た。

清彦「こうして我々男女四人、此島に渡つた以上は、何れも獨身生活は不便なものだ。恰度諸冊二尊が自轉倒島に天降り玉うた樣なものだ。此大木を撞の御柱と定めて、

……あなにやしゐー乙女……とか……ゐー男……とか云つて、惟神の神業を始めたら如何でせう。……照彦さん、私は媒酌人となつて、清子姫様と結婚の式をあげられたらどうです。……ナア清子姫さん、あなたも何時迄も獨身で斯様な僻地に暮す譯にも參りますまい」

清子姫「ハイ、有難う御座います。併し乍ら少し考へさして頂きたう御座います」

清彦「清子さん、あなたは照彦さんがお氣に入らぬのですか」

清子「イーエ、勿体ない、左樣な譯では御座いませぬ」と涙ぐまし氣に俯く。

照彦「コレ〳〵清彦、御親切は有難いが、モウ結婚の事は言つて呉れな。清子さんは此照彦がお氣に召さぬのだよ。無理押しに決行した所で、うまの合はぬ夫婦はキッと後日破鏡の歎きに會はねばならぬから、此話は止めて貰はう。就いては照子姫さんを、お前の奥さんに御世話したいと思ふのだが、どうだ」

清彦「それは實に有難い、併し乍ら照子姫さんの御意見を承はりたい。其上でなくば何とも返答する事が出來ないワ」

照子「照彦さんの御親切は有難う御座いますが、妾は何だか……どこが如何といふ事はありませぬが、清彦さんは虫が好きませぬワ。妾の意中の人は露骨に言ひますが、照彦さんで御座います。あなたならばどこまでも、偕老同穴の契を結んで頂きたう御座います」

照彦「コレハ〳〵大變な迷惑で御座る。實の所は此照彦、清子姫様と夫婦の約束が結びたいのです。それに清子さんは、何とかかんとか仰有つて、私を御嫌ひ遊ばす樣な

形勢です」

清子姫は「ホ、、、、」と袖で顔をかくし

清子「妾も本當は清彦さんと夫婦になつて、神界の御用が致したう御座います。眼彦さんと夫婦になるのは、何だか身魂が合はない樣な氣分が致します」

清彦「互に目的物が斯う複雜になつて居ては仕方がない。ハテ困つたな。此方が好だと言へば向うが嫌ひだと云ふ、此方だ嫌ひだといへば一方が好だと云ふ。此奴アどうやら人間力で決める事は出來ないワイ。言依別命樣でも御座つたならば、判斷をして定めて貰ふのだけれど、斯樣な結構な洞穴館に、誰も居らぬことを思へば、言依別の神樣は、琉、球の寶玉を手に入れ、早くも出發された後と見ゐる。ハテ……困つたなア」

四人は互に顏を見合せ、靑息吐息の眞最中、洞穴の入口に二三人の聲が聞ゐて來た、清彦は耳敏くも之を聞付け

清彦「ヤアあの聲はどうやら、高姫の聲らしいぞ。一寸査べて來るから、三人仲よく待つて居て下さい」

と早くも洞穴の入口に立つた。

外には高姫、春彦、常彦と共に佈相に洞穴を覗いて居る。月明かりに三人の顏はハツキリと見ゐた。されど高姫の方からは、清彦の姿は少しも見ゐない。清彦は傍の小石を拾ひ、左右の手に持つて中よりカチ〳〵と打つて見せた。

高姫「大變な大きな洞空であるが、何か此中に獸でも棲まつてゐるような氣配が致しますぞ。……常彦、一寸お前、中へ這入つて調べて來て下さらぬか」

清彦中より「カチ〳〵〳〵」

常彦「ハハー、ここはカチ〳〵山の古狸が住居して居る洞穴と見ますワイ。……オイ春彦、お前、斥候となつて一つ探險して來たら如何だ」

春彦「お前に命令が下つたのだ。狸の巣窟へ、常彦が這入るのは當然だよ。マア君子は危きに近よらずだ。命令も受けないことを、危險を冒して失敗しては、それこそ犬に喰はれた樣なものだ」

高姫「春彦、お前も一緒に探險に這入つて來るのだよ」

春彦「たかが知れた、此洞窟、そう二人も這入る必要はありますまい」

高姫「ア、そうだらう。そんなら一人で良いから、春彦さん、お前豪膽者だから這入つて下さい」

春彦頭をかき乍ら

春彦「へー……ハイ」

ヒモジ〳〵して居る。「カチ〳〵〳〵〳〵ウー」と唸り聲が聞こえて來る。

春彦「モシ〳〵高姫さん、此奴ア一人では如何しても往きませぬワ。あの聲を御覽、數十匹の猛獸がキツと潜んで居ますよ。グヅ〳〵して居ると、一も取らず二も取らず虻蜂取らずになつて了ひますぜ」

高姫「其虻蜂で思ひ出したが、彼奴は何でも言依別命から、清彦、照彦と云ふ名を頂き宣傳使になり、飽迄も我々に反抗的態度を執ると云つて居たそうだが、今ここに如何して居るだらう。言依別命が此琉球へ渡り、琉と球との寶玉を手に入れ、自分の隱した七個の玉と共に、高砂島へ持ち渡つて、高砂島の國王となる計畫だと聞い

て居る。自轉倒島では此高姫の日の出神の生宮が、目の上の瘤となつて思はしく目的が立たぬので、高姫の居ない地點で野心を遂行すると云ふ考へで、大切な寶玉を盜み出し、自轉倒島を立去つたのだから、假令言依別、天を翔り地を潛るとも、草を分けても探し出し、寶玉を取返し、そうして彼が面皮を剝いて、心の底より改心さしてやらねば、我々の系統としての役目が濟まぬ。ア、年が寄つてから、又しても〳〵海洋萬里の波を渡り、苦勞を致さねばならぬのか。これも全く言依別の肉體に、惡の守護神の憑依してゐるからだ。……あゝ、惟神霊幸倍坐世。一時も早く言依別の副守護神を退却させ、誠の大和魂に立返つて、日の出神の命令を聞く樣にして下さいませ」

と半泣聲になり、鼻を啜つて兩手を合せ、一生懸命に祈願して居る。清彦は此態を見て俄に可笑しくなり「ブーッ〳〵」と吹き出し、終ひには大聲をあげて

清彦「ワッハ、、、」

と笑ひ轉げた。

高姫「誰だ。日の出神の生宮が神界の爲、一生懸命御祈願を申し上げてるのに、ウフ、アハ、、、と笑ふ奴は……よもや狸ぢやあるまい。何者だ。サアこうなる上は高姫承知致さぬ。此入口を青松葉でくすべてでも往生さしてやらねば措かぬ。……コレ常彦さん、春彦さん、そこらの、青いものを持つて來なさい。コラ大變な切經た古狸が居るのだ。四つ足が切經ると人語を使ふやうになるからなア」

清彦「コレハ〳〵高姫樣、常彦、春彦の御兩人樣、遠方の所遙々と能くこそ御越し下さ

いました。ここは琉球王の假館、木の丸殿と云ふ所で御座います。王様は……言依別神様とやらが、自轉倒島から遙々御越しになり、琉と球との寶玉を御受取り遊ばし、臺灣に一寸立寄り、それから南米の高砂島へ御越しになりました不在中で御座います。妾は虻……オットドッコイ、危い猛獸毒蛇の澤山に棲息する兇島に留守を守つて居る大蛇姫と云ふ、夫は〳〵厭らしい女で御座います。サア御遠慮は要りませぬ。此洞穴には澤山な古狸や大蛇が住居を致し、今日の所綺麗な男が二人、綺麗な女が二人、四魂揃うて守護を致してをります。併し乍ら何れも本當の人間では御座いませぬ。皆化物で御座いますから、其お積りで御這入りを願ひます。メッタにあなた方を盧をつけて頭から咬んだり、蛇が蛙を呑むようにキユウ〳〵と呑み込むやうな事は御座りませぬ。如意寶珠の玉でも呑み込むと云ふ不可思議力を備へた貴女、早く御這入り下さいませ」

高姫「這入れなら這入つてもあげませう。併し一遍外へ姿をあらはし、案内をなさらぬか」

清彦「外へ出るが最後、虻公の正体が現はれますわい。アッハ、、、」

高姫「最前から何だか可笑しいと思つて居つた。お前は淡路の東助の門番をして居つた泥坊上りの虻公ぢやないか。如何して又斯んな所へやつて來たのだ。お前はドハイカラの教主から、清彦といふ名を貰うたぢやないか。自轉倒島では最早泥坊が出來ないと思うて、こんな所まで海賊を働き漂着して來たのだらう。サアお前一人ではあるまい、大方蜂も來て居るだらう。其他の同類は殘らず此處へ引張つて來なさい。天地根本の誠の道を說いて聞かせ、大和魂をねりなをして助けて上げよう。事と

品によつたら此高姫が家來にしてやらぬ事もない」

清彦「今お前さんに這入られると、實は困つた事があるのだ。今日は情意投合……オツトドツコイ……情約履行をせうと云ふ肝腎要な吉日だ。お前さんのようなお婆アさんは我々壯年者の心理は分るまい。あゝエライ所へエライ奴が來たものだ。月に叢雲、花に嵐、美人の前に皺苦茶婆ア……」

と小聲に呟いた。高姫は其言葉の一端を耳に入れ

高姫「ナニ、美人に皺苦茶婆アと言つたなア。コリヤ何でも秘密の伏在する此洞穴、モウ斯うなる以上は强行的に押入り、隅から隅まで調べてやらねばなるまい。ヒヨツとしたら天火水地の寶玉も隱してあるか分らない。……常彦、春彦、妾に續け」

と言ひ乍ら、清彦が「待つたゝ」と大手を擴げて遮るのも聞かず、むりやりに飛び込んで了つた。

奥には巨松の明りが瞬いて居る。四人の顏はハツキリと輪廓まで現はれて居る。

高姫「コレハ〳〵皆さん、御樂しみの最中、御邪魔を致しまして申譯のない事で御座いました。花を欺く美男子と美人、そこへ白髮交りの脂脫婆アが參りまして、嘸、折角の興がさめた事で御座いませう。此洞穴に似合はぬ……お前さんは美しい方だが此島の方か、但は虹、蜂の兩人に拐かされてこんな所へ押込められたのか、樣子がありそうに思はれる。サア包まずかくさず仰有つて下さい。日の出神の生宮が此場へ現はれた以上は、虹、蜂の兩人位何と云つても駄目ですよ」

清子姫、照子姫兩人は行儀よく兩手をつき

兩女「ハイ有難う御座います。聖地に於て御高名著しき、あなた樣が高姫樣で御座い

ましたか。妾は比沼の眞奈井の寶座に仕へて居りました清子姫、照子姫の兩人で御座います」

高姫「かね〳〵黒姫さんから承はつて居つた、比治山の隱家に厶つた淑女はお前さんの事であつたか。如何して又かような所へお越し遊ばしたのだ。大方虹、蜂兩人の小盜人に拐はかされて、斯んな所へ來なさつたのだらう。グツ〳〵して居ると此奴アの〇〇をしかねまい代物です。最前も小聲に情約履行の間際だとか何とか吐いて居ました。サア、妾が來た以上は最早大丈夫、高姫と一所に此琉球の島を探險し、結構な寶玉の所在を求め、言依別の後を追うて、其七つの寶玉を手に入れて聖地に歸り、大神樣の御神業をお助けせうではありませぬか」

二人は顏赭らめて、無言の儘俯いて居る。清彦は高姫の胸倉をグツとぢり

清彦「コラ婆ア、小盜人とは聞捨ならぬ。三五教の宣傳使清彦、照彦の兩人だ」

高姫「ヘン、馬鹿にするない。お前たちが胸倉を取つて威喝した所で、そんな事にビクとも致す高姫ちやありませぬぞ。虹、蜂の小泥坊が憑ろしくて、こんな所まで活動に來られますかい。今は宣傳使でも、昔はキツパリ泥坊をやつて居たちやないか」

清彦「昔は昔、今は今だ。改心すれば其日から眞人間にしてやらうと神樣が仰有るちやないか。俺が泥坊なら高姫は大泥坊だ」

高姫「オイ常彦、春彦、何をグツ〳〵して居るのか、高姫が此通り胸倉を取られて居るのに平氣で見て居ると云ふ事がありますか」

常彦「左樣で厶います。あなたも餘り我が强いから、神樣が清彦さんの手を借つて身魂研きをなさるのだと思つて、ヂツとして御神德を頂いて居ります。……なア春彦さ

ん、キッと善が勝つと神さまが仰有いますから、今善惡の立分けが始まるのですで……高姫さん、シッカリやりなさい。……清彦さん、何方も負て下さるなや」

照彦はムックと立上り、行司氣取りになつて、そこにあつた芭蕉の葉の端をむしり唐團扇の樣な形にして、右の手に捧げ

照彦「東西……東は高姫山に、西イ清彦川……何れも一番勝負、アハ、、、、」

と笑つて居る。高姫は金切聲を出して、爪を立て、一生懸命に掻きむしらうとする。強力な清彦に兩方の手首をグッと握られ、如何ともすること能はず、目計り白黑させ前齒のぬけた口から、臭い息と唾とを盛に吐き出して、清彦の顏に注いでゐる。清彦も堪りかねて兩方の手をパッと放した。照彦は中に割つて入り

照彦「御見物の方々、此勝負は照彦が來年迄お預りと致します」

高姫「清子姫さん、照子姫さん、お前さんは、斯んな亂暴な男を何と思うてゐられますか」

清子「ハイ、御二人共申分のない、立派なお方で御座います。中にも清彦さんはさこともなしに虫の好く御方ですよ。……なア照子姫さん」

照子「あなたの御言葉の通り、御二人共本當に立派な方ですワ。妾は何だか照彦さんの方が、中でもモ一つ立派な方だと思ひます、ホ、、、、」

と俯く。

高姫「清彦が妾の胸倉を取つたのも道理、二人の男に二人の女、好いた同志が今晩こそは、此離れ島で何々せうと思うてる所へ、此婆アがやつて來たものだから腹が立つたでせう。御無理もありませぬ。併し乍ら緣と云ふものは汚いものぢやな。行成彦

命の系統をうけた御兩人さんが、人もあらうにこんなお方の女房にならうとは、イヤモウ理外の理、高姫感じ入りました。併し言依別命さんは此處へ來られたか御存じでせうな」

清子姫、照子姫一時に

兩人「ハイ、おいでになつた相で御座います」

清彦「おいでになるはなつたが、龍の腮の二つの玉を手に入れ、意氣揚々として、遠の昔臺灣島へ行き、それから南米の高砂島へ渡られたといふことだ。我々もその琉と球との二つの玉を手に入れる爲にやつて來たのだが、一足遲れた爲に、後の祭り、せめても腹いせに男女四人が、撞の御柱を巡り合ひ、美斗能麻具波比をせなと宜り玉ひ、此島の守り神とならうと思つて居る所ですよ」

高姫「何とお前は男にも似合はぬ、チッぽけな肝玉だな。此廣い世界に斯んな島を一つ治めて滿足してゐる樣な事では、到底三千世界の御用は出來ませぬぞや。併し乍ら身魂相應な御用だから、何程烏に孔雀になれと言つたつてなれる氣遣ひはなし、仕方がないなア」

と揚げ面し、冷笑を泛べて居る。

照彦「高姫さん、餘り見下げて下さいますな。私だつて琉と球との玉を手に入れ、言依別さんの隱された七つの玉を、假令半分でも探し出し、そして、高砂島は申すに及ばず、筑紫の島から世界中の覇權を握る位な考へは持つて居るのだが、肝腎な琉と球との寶玉を言依別に取られて了つたのだから、後を附け狙うと云つても見當がつかぬだないか。それだから百日百夜水行でもして、二夫婦の者が玉の所在を探しに

行かうといふ考へだ。百日の水行をすれば世界が見ねすくと三五教の神様が仰有るのだから、玉の所在は素より、言依別の行方も分るのだ。あなたは日の出神の生宮なら、猶更分るでせう」

高姫「きまつた事だよ。分ればこそ、こゝ迄從いて來たのだ……サア言依別命、餘り遠くは行くまい。グヅ〳〵してると又面倒だ。……常彦さん、春彦さん、早く參りませう。なる事ならば照子姫さん、清子姫さん、あなた丈は私のお供なさいませぬか。虻、蜂兩人の女房になるのは一つ考へ物ですで」

清彦「エー又婆アの癖に構やがる。サア早く出て行け」

高姫「出て行けと言はなくても、こんな所にグヅ〳〵して居れるか。……サア常彦、春彦、早く〳〵」

とせき立てゝ、立ち去らうとする。

常彦「モシ〳〵高姫さん、何程急いだつて、なる樣により成りませぬで。今夜はこゝで宿めて貰つて、明日の朝ゆつくり行きませうか……ナア春彦、お前も大分に草臥れたゞらう」

春彦「草臥れたと云つた所で、船の中に浮いて居るのだ。目的が立つてから、何程ゆつくりと休まうとまゝだ。サア行かう」

と厭さうにしてる常彦の手を取り、引摺るようにして、高姫と共に此洞穴を脱け出し路々祝詞を奏上し乍ら、奪や石松の茂る珊瑚岩の蔭列せる濱邊を指して一目散に駈つけ、乘り來し船に身を任せ、一生懸命南を指して大海原を漕ぎ出した。

（大正一一、七、二七、舊六、四、松村眞澄錄）

瑞　月

むすぼれし心の髪をとき解く奇しき教は神の御言葉
五十鈴川清き流れは皇神の恵みの露の垂るゝなるらむ
三五の神の教はうば玉の暗路を照す光なりけり

第五篇　清泉

靈沼（一四二）

第一六章　琉球の神（七九八）

高姫一行が立去つた後の洞穴は、水入らずの男女四名、互に秘密を半打明けて一種異樣の氣分に打たれてゐる。

斯る處へ言依別命は國依別、若彦、常楠、チヤール、ベース其他の土人を引伴れ此洞穴指して一先づ歸り來り、入口より中を覗けば燈火がついて居る。而して奥の方に何か人影が見われてゐる。國依別は一同に向ひ

國依「ヤア皆さん、御苦勞で御座いました。誰か氣の利いた土人を見わるが、燈火をつけて待つてゐる樣です」

と云ひ乍ら一足先に入つた。清彦は此姿を見て

清彦「ヤア」

とばかりに驚き、側に駈寄つて

清彦「是は〳〵國依別樣でムいますか。ヤア言依別の敎主樣、大勢の方々、よくマア御いで下さいました。御承知の通りの荒屋、奪が澤山に御座りますれば、悠乎と御召り遊ばして御話を願ひます」

國依「ヤアお前は清彦ぢやないか。何時の間にやら我輩の邸宅を横領して、主人氣取りになつて了つたのだな……敎主樣、其他御一同樣、清彦が御留守宅へやつて來て居ります」

清彦「どうぞ奥へ御通り下さいませ」

國依「主客顚倒とは此事だ。ヤア奥には照彦其他二人の頗る美人が居るではないか。中

々抜目の無い男だね」

言依「ア、若彦さん、常補さん、ヤア奥へ御進み下さい」

常補「若彦は琉球の玉を奉じ、洞穴内の最も高き處に安置し、柏手を打ち一生懸命に何事か小聲に唱へてゐる。

清彦、照彦、清子姫、照子姫は兩手をつき

「是は〳〵敎主樣、不思議な所で御目にかゝりました。先づ〳〵御無事で御目出度うムいます」

言依「ヤア有難う。御神德を以て龍の腮の琉球の寶玉はうまく手に入りました。就ては貴女方はどうして又斯樣な處へ來たのですか」

清子「ハイ、妾は比沼の眞名井の寶座に於て、照子姫樣と禊を修して居りました。處が

瑞の寶座は俄に鳴動を始め、四邊に芳香薫じ、微妙の音樂聞ゑ來ると思ふ間もなく、忽然として現はれ玉ひし豐國姫の御神姿、言葉靜かに宣らせ玉ふやう……この寶座は、妾寸時神界の都合によつて或地點に立向ひ、神靈不在となれば、汝等二人は一刻も早く此場を立去り、由良の港の秋山彦が館に、龍宮の麻邇の寶珠集まり玉へば之を奉迎せよ……神素盞嗚大神、國武彦命も御でましになつてゐる……この事に、旅裝を整へ由良港へ參りしも後の祭となり、其儘聖地に上り、玉照彦、玉照姫樣の神勅や、貴方樣の御教示を拜して高熊山に登り、三週間の行を爲し、いろ〳〵の神界の御經綸を承はつて、漸くこゝに參つたものでムいます。ところが途中に於て船を暗礁に乘せ上げ、生命危い所に御兩人樣に助けられ、結構なる御神德をうけましたものでムいます」

言依「それは皆さん、結構で御座いました。吾々とても琉球の寶玉を斯の如く無事に拜領し來れば、これよりは益々神德著く、御神業も完全に成就する事と悅んで居ります」

國依「モシ〳〵常楠さん、貴方の血緣の兩人が此處に御越しになつてゐるといふのも、不思議の經綸ぢやありませぬか。照彦に清彦、照子姫に清子姫、これ又一つの不思議、……常楠に常彦、……これも亦不思議。畏れ多い事だが言依別樣に國依別、若彦さんにチヤール、ベース、名までよく情意投合してゐる樣ですなア。アハヽヽ」

常楠「お前は清彦、照彦の兩人、ようマアこんな處まで尋ねて來てくれた。親なればこそ、子なればこそだ」

清彦、照彦兩人は一度に

兩人『吾々は斯樣なところでお父さんに御目に掛らうなどとは、夢にも思つてゐませぬでした。教主樣の後をつけ狙つて高姫一行が參つたと聞き、心も心ならず、御後を慕つて御用の末端にもと思ひ、出て參りました。併し乍ら最早教主樣は此島を既に〳〵御用了り、御出立の後ならんと落膽致して居りましたが、併しこゝで御目に掛りましたのは何より有難い事で御座います』

言依『あゝさうであつたか。それは大いに心配を掛けたなア。併し高姫さんは執拗にも斯樣なところまで、吾々の後を追つて來たのかなア』

清彦『高姫さんは假令高砂島の果までも貴方の御後を尋ね廻り、七つの寶玉の所在を探して教主樣を改心させなならぬと言つて、今の今もてこの洞穴に御越しに相成り、常彦、春彦と共に、大變に我々兩人に毒吐いた揚句、一歩も動かならぬ。言依別の後を追つてやらうと云つて、慌しくこゝを立去られた所で御座います。モウ今頃は何處かの濱邊から、船に乘つて漕ぎ出してゐる位でせう』

言依『何處までも玉にかけたら執念深い高姫だなア。アヽ、仕方が無い』

と双手を組んで思案に暮れる。

言依『さうすれば高姫さんは、又我々の渡る高砂嶋へも行くに違ひ無い。瑞、球の寶玉を持つて參れば、又しても罪を作らす樣なものだ。是から區依別と兩人が玉の精靈を我が身魂に移し、形骸丈は……若彦さん、御苦勞だが二つとも貴方が守護して、再度山の龍なる玉能姫の館へ持歸り、夫婦鎭ふて此玉の保護をし下ら、神界の御用をして下さい。貴方も此御神業が成就した上は、玉能姫の夫として同樣されても差支は有りますまい』

若彦はハッと驚き、有難涙に暮れ乍ら

若彦「情の籠つた教主の御言葉、有難く存じます。左様なれば此玉を保護致し、生田の森の神館へ持歸り、貴方の聖地へ御歸り遊ばす迄大切に守護致します」

言依「早速の御承知、一日も早く御歸り下さい。……又常楠翁はこの琉球島の土人の神となり、王となつて永遠に此處に鎮まり神業に盡して貰ひたい。……清彦、照彦は常楠と共に本島を守護致し、餘力あれば臺灣島へも渡つて三五教を弘め、國魂神となつて土民を永遠に守つて下さい。言依別はこれより國依別と共に、高砂島へ渡り、夫より常世國を廻つて波斯の國、產土山脈の伊曾の舘に立向ふ考へだ。隨分神樣の御惠を頂いて壯健無事に御神業に參加されよ」

と宣示する。一同はハッとばかりに有難涙を出し、頭を地につけて暫く泣き伏しうしてゐる。

こゝに言依別は琉の球の精靈を腹に吸ひ玉ひ、國依別は球の球の精靈を吸ひ、終つて二個の玉手箱を若彦に渡した。若彦は押頂いて、直にチャール、ベースの二人に船を操らせ寶玉を保護し、荒浪をわけて、再び自轉倒島の生田の森に引き返す事となつた。

これより若彦、玉能姫は生田の森に於て夫婦の息を合せ、神界の爲に大功を顯はしたのである。

言依別命は國依別を伴ひ、琉球全体の守護權を、常楠、清彦、照彦に一任し、悠々として土人二名を引伴れ、船を操らせ乍ら、萬里の波濤を蹶つて高砂島に向つて出發された。又清子姫、照子姫は言依別の後を追ひ暗夜に紛れて船に乘り、高砂島へ進

む事となつた。

清彦、照彦はこの二人の美女が何時の間にか、此島より消え去りしに一時は落胆したが、よく顧みれば、自分には紀の國に妻子ある事を思ひ出し、天鄕建反の行動となるに思ひ當り、この戀を斷念する事となつた。然るに清彦、照彦二人の妻子は、夫を捨て、何處へか姿を隱したる事後に至つて判然し、常楠の命に依つて貴人の媒を妻となし、清彦は琉球の北の島を、照彦は南の島を管掌し、永遠にその子孫を傳へたのである。

又常楠はハーリス山の山深く進み入つて生神となり、俗界より姿を隱して了つた。然に到る迄不老不死の仙術を体得し、琉球島の守護神となつてゐる。あゝ、生神豊幸倍坐世。

（大正一一、七、二七、於六、四、外山豊二録）

瑞月

松の葉の心になりて世を渡れ細くかたくて風に破れず

手のうちに世界を丸め握る其神の恵みを夢な忘れそ

第一七章　沼の女神（七九九）

言依別命、國依別は高砂島へ、若彦は自轉倒島へ、照子姫、清子姫は言依別の後を慕うて立去つた後の清彦、照彦は、父の常楠と共に此離れ島に殘され、恰も遠島に流されし如き淋しみを感じた。これより親子三人の交際は益々親密を加へ、よく父子兄弟の順序行はれ、數多の土人の益々崇敬の的となつて居た。

此島に琉球沼と云ふ至つて廣き蘭の密生した沼がある。或夜清彦の夢に……清子姫照子姫の二人、沼の對岸に現はれ、白き細き手をさし延べて清彦に向ひ

「琉球へおじやるなら、草鞋穿いておじやれ、琉球は石原、小石原」

と歌つて踊りしと夢見て目が醒めた。

土人のエムとセムとの從者に向つて清彦は

清彦「此島に琉球沼と云ふ廣大無邊な清泉を湛へた沼があるか」

と尋ねて見た。エム、セムの二人は言下に首を縦にふり乍ら

エム「有ります〳〵、確に立派な沼があつて、蘭が周邊に密生し、比較的淺く、そうして外の沼とは違つて、水底は小砂利を以て敷つめた樣な、氣分の良い沼です。其中央に珊瑚礁で作られた立派な岩があり、其岩には大きな穴が開いて居る。其穴を這入ると中は千疊敷で、時々立派な美人が其穴より二人現はれ、金扇を擴げて踊り狂ひ舞ふとの事です」

セム「此里の者は傳說に聞く計り、恐れて近寄つた者はありませぬ」

清彦「お前知つて居るなら、そこまで案内をして呉れないか」

エム「御案内は致しますが、うつかり沼の中へでも這入つて貰つたら大變です」

清彦「照彦、お前も行かうぢやないか。清子姫、照子姫と寸分違はぬ美人が肩を擦けて我々兄弟二人を待つて居るぞよ」

照彦「兄貴、それは夢だないか。除り清さん照さんに精神を取られて居るものだから、そんな夢を見たのだよ。キツと大蛇の御化にきまつてゐる。私はマア止めておかうか」

清彦「ハテ氣の弱い。兎も角經驗の爲に行つて見たら如何だ。別に外に忙しい用がある云ふのではない。物は經驗ぢやないか。將來此島の霸王とならうと思へば、隅々までも探險しておく必要があるだらう。……お父さん、如何でせう。我々兄弟、エムとセムを案内者として一度探險に行つて來たいと思ひますが……」

常楠「確を言つても、こゝは世界の秘密國だ。御苦勞だが一つ調べて貰ひたい。……エム、セムの二人、お前御苦勞だが、二人の案内をしてやつて呉れ」

エム、セムの二人は一も二もなく承諾をした。茲に四人は常楠と共に天津祝詞を奏上し、成功を祈願し終つて、草鞋脚絆の輕裝にて、一本の杖を携へ、芭蕉の葉で編んだ一文字笠を頂き乍ら、一天雲なき青空を草を分けて、琉球沼の畔に辿り着いた。里程は殆ど今の十里位である。湖邊に着いた頃は太陽は既にセークス山の頂きに沒し、山の影は湖面を蔽ふ頃であつた。

清彦は沼の畔に立つて、湖面を眺め歌つて見た。

清彦「神の教に清められ　魂を研いた清彦や
身魂も四方に照り渡る　照彦宣傳使

琉球の沼に永久に　鎭まりゐます心も清き清子姫
身魂もてれる照子姫　清と清との清い仲
照と照との明い仲　エムとセムとの案内にて
お前に會はんとこがれ〳〵て　出て來たやさしい男
セークス山に日が隱れ　早烏羽玉の夜は近づいた
清い〳〵朝日の如く　明き〳〵天津日の
照り輝く如く　實に魔しき男と男
夢の中なる女を尋ね　夢に夢見る心地して
此處まで尋ねて來た男　沼の女神よ心あらば
男の切ない思ひを汲めよ　夢の中とは言ひ乍ら
お前は私を清い心で　呼んだでないか
白きただむき淡雪の　若やる胸を素だゝき
たゝきまながり眞玉手玉手　互にさしまき腿長に
永火を合して此島の　守りの神とならうでないか
夢の中なる清子姫　照子の姫よ遙々と
訪ね來れる清彦や　照彦の眞心を
仇に思ふな沼の主」

と歌つた。

照彦は清彦の歌の終るを待ち兼ねた樣に

照彦「かくれた〳〵日輪樣は　セークス山の蔭に

沼を包んだ涼しい影に　我等が心も涼しくなつた
心は照る〳〵身魂は清く　小石の並んだ沼の底
小魚の躍りもよく見える　踊るは小魚のみでない
眼彩心も勇み立ち　思はず手足が踊り出す
照れよ照れ〳〵心の光　清い身魂に宿つた神の
分の靈魂の清彦兄貴　兄弟二人が姉妹を
尋ねて來たのも外でない　昨夜兄貴が見た夢の
沼の女に會ひたさに　木の丸殿を立出で、
エムヒセムヒに惹られて　草野を分けてやつて來た
男心を汲み取つて　早く姿を現はせよ

沼に泛んだ珊瑚礁　エムヒセムヒの話を聞けば
黄金の扇打振ゆ　末女の樣な乙女子が
何時も現はれますと聞く　私等二人は琉球の
國の魂と仕げられて　森に現はれ照りわたる
月日の光を身に受けて　二人と二人の心を合せ
北と南の夫婦島　千代の契を結ばう
お前にこがれて來た男　仇に返すな沼の主」
と歌ひ終つて、四人は美はしき砂の布きつめた樣な淺き沼を、小さき雜魚を驚かせ乍ら、バサ〳〵と、騒ならぬ波を立て、進んで行く。
遥彼方に黑ずんで浮いて居る珊瑚礁の影、日は漸く地平線下に沒し、そろ〳〵暗の

帳は下されて來た。涼しき風は一行の面を撫で、水深は最早太腿の所まで浸された。

忽ち島はポーッと明くなつた。四人は何となく心勇み明りを目當に進んで行く。

忽ち現はれた八尋鰐、此處よりは水深俄に增して到底前進する事が出來ない。ハタと當惑して居る矢先、八尋鰐は橋の樣になつて其前に橫たはつた。幾十とも知れぬ鰐は珊瑚礁を基點として、長き橋を架けた樣に單縱陣を作り、四人の男に此上を渡れ……

と言はぬ計りの意思を示した。

清彥外三人は神言を奏上し乍ら、鰐の脊を覺束なげに踏みこゝ〳〵、漸くにしてポツと明い珊瑚礁に辿り着いた。振りかへり見れば今迄現はれた八尋鰐の姿は水泡の如く消ゑ果て、後には波靜かに魚鱗の如く漂うて居た。

清彥は珊瑚礁に安着した祝ひに、心も何となくいそ〳〵し乍ら、又も歌ひ踊つて居た。

清彥「こゝは琉球の中心地點　夢の中なる戀妻の
堅磐常磐に隱れたる　高砂島か珍島か
珍の女神の御玉の住處　琉球へおじやるなら
草鞋穿いておじやれ　琉球は石原小石原
唄つて聞かした二人のナイス　今はいづくに身をかくす
はる〳〵尋ねて來た男　出迎へせぬとは無禮ぞや
私も男の端ではないか　龍の化身か天女の果か
但は清子照子の幻像か　眞僞の程は我々の
戀に迷うた眼には　ハッキリ分らない

夢に歸つたお前の姿　白い肌や白い腿
太い乳房をブラ〳〵と　見せたる時の心持
俺はどうしても忘られぬ　戀の暗路に迷うた男
琉球の沼で兄弟が　戀の虜とならうとは
夢にも思はぬ清彦が　赤き心を知るならば
夢を破つて現實の　清子の姫や照子姫
早く姿を現はせよ　お前に會ひたさ醜見たさ
千代も八千代も添ひたさに　父の前にて言舉げし
弟までも誘うて　やつて來たのは阿呆らしい
清姫、照姫心あらば　夢の姿を現實に

早く現はせ自轉倒の　神の島をば後にして
遙々尋ねて來た男　兒島半島の磯邊近く
波に揉まれて暗礁に　船を乘りあげ玉の緒の
消ゆる命を助けた俺達兄弟　瑞の寶座に仕へて居つた
お前二人を女房にせうと　兄弟二人が目星をつけて
互に戀を爭ひつ　其煩さに烏羽玉の
暗に紛れて逃げ出した　お前は清さん照さんだらう
言伝別の後追うて　萬里の波濤を横ぎりつ
高砂島へ渡り越したと思ふたお前　やはり琉球が戀しうて
五月蠅い二人を振棄て　水で圍んだ此沼の

珊瑚礁をば寶座とし　千代に入千代に永久に
此岩窟に身を潜め　戀を葬るお前の心
とは言ふものゝ魂は　ヤッパリ我々兄弟を
忘れかねてか昨夜の夢に　黄金の扇子を打攪ぜ
心も清き清彦を　笑を湛へて招いたぢやないか
神の結んだ尊い夫　出迎へせぬとは沒義道だ
戀に上下の隔てはなかろ　三國一の婿が來た
早く鐵門を押しあけて　二人の男を迎へ入れ
お前の初戀うま〳〵と　叶へてやらう又私の
初戀ならぬ二度目の戀路　國に殘した妻子はあれど
何時の間にやら人の妻　行方も知らぬ妻子の身の上
斯うなる上はよもや　天則違反に問はれはすまい
何の躊躇も要るものか」

と歌ひ終つた。此時岩窟の中より、岩の戸を取外して現はれ出でた、ダンダラ筋の被衣をつけた四人の男、四人の前に目禮し、無言の儘差し招き、うす暗い岩窟を先に立つて下つて行く。四人は後に從ひ、細き岩窟を稍腰を屈めて、右に左に上りつ下りつ、パッと明るい廣場に辿り着いた。

迎への男は手眞似で、こゝに暫く休息せよと示した。四人は格好の岩の突起に腰を打ちかけ、暫く息を休むることゝなつた。迎への男は其儘ここともなく姿を隱した。

劉曉たる音樂の音四方より響き來る。

暫くあつて二人の美人桃色の顔容に櫻絡の附いたる冠を戴き、玉串を兩手に捧げ、悠々として此場に現はれ來り、一人は稍丸顔に少しく身体太り、一人は少しく年若く顔は細型に體もそれに應じて稍細く、三十二相の具備したる觀自在天の如き容色麗麗にして、其崇高き事譬うるに物なき計りであつた。清彦、照彦は餘りの美はしさと莊嚴さと、どこともなく犯す可らざる威嚴の備はるあるに、稍怖氣づき、呆然として其姿を見守るのみであつた。先に立つた女神は清子姫である。花の如き唇を淑やかに開いて清彦に向ひ、歌つて言ふ。

清子姫「妾は聖地エルサレム　神の都に住へたる
天使の長と現れませる　廣宗彦が四代の孫
魂も清き清子姫　汝が父の常楠は
國彦、國姫が三代目の曾孫　元を糺せば古より
切つても切れぬ神の綱　戀の懸橋永久に
落ちず流れず清彦が　妻となるべき清子姫
お前は身魂の因縁を　顧みずして照子姫に
恐びをかけし戀男　モウ斯うなる上は
定まる緣と諦めて　清子姫の夫となり
夫婦仲よく此島に　いや永久に住居して
國の司とならうでないか　櫻の洞にて出會うた女
姿も顔も少しも變らぬ清子姫　最早お前の怪しの夢は
醒めたであらう　あなにやし好男

あなにやし好乙女よと　八千代を契る玉椿
幾千代迄も添ひ遂げて　神の御旨に叶へまつれよ
我戀ふる清彦の司　これぞ全く言依別の
教主の定め玉ひし　二人の縁
よもや否應ありますまいぞ　色好き應答を松虫の
泣いて暮した我心　仇には棄てな三五の
神の司の清彦よ　朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも　假令大地は沈むとも
神の結んだ此縁　お前が心の怪しき曲者に
破られそうな事はない」

「サア〳〵おじや」……と手を執れば、清彦は案に相違の面持にて、清子の姫をよつく見詰め、俄に姫が戀しくなり、手を引かれ乍ら歌ひ出した。

清彦「神の結んだ二人のゑにし　深い仕組は知らずして
汚れ果てたる身魂を持ち乍ら　お前は好ぢや嫌ひぢやと
小言を云ふた耻かしさ　今のお前の姿を眺め
照子の姫に彌まさる　頓に戀しくなつて來た
ホンニお前は美しい　實に愛らしい妹ぢやぞね
夢に牡丹餅、地獄で佛　何に譬ん今日の喜悦
夢の中なるナイスに出會ひ　未だ夢見る心地して
胸の鼓動はドキ〳〵と　まだ治まらぬ清彦が

心の切なさ嬉しさよ　是も夢ではあるまいか
夢なら夢でも是非はない　いつ〳〵までも此儘に
夢は醒めざれ夢に夢見る　浮世の夢は
天國淨土のパラダイス　芙蓉の山に永久に
鎖まりゐます木花咲耶姫　神の惠の露にぬれ
此儘此處で我と汝と　夫婦の契いや永く
相生の松の色深く　褪せずにあれや　惟神
御靈幸はひまし〳〵て　心清彦、清子姫
幾久しくも夢の浮世の　夢は覺めざれ」
と歌ひつゝ奥深く導かれ行く。音樂の聲頻りに響き來り、得も言はれぬ芳香四邊を包む。

照子姫は莞爾として照彦に向ひ

照子姫「ケヽ好男〳〵
離久の暗を吹き拂ひ　心の色も照彦が
ゐにしを契る今日の生日の足日こそ　神の御のエルサレム
源遠く廣宗彦の　神の結びし妹と脊の
照子の姫は今茲に　珍の血筋と生れたる
心も清き蘭草をば　汝の來るを待受けて
薔薇の疊織成して　刈り干し來り香も高き
心に浮ぶ日月は　今迄待ちし纒の淵
沼の清水の面清く

照子の姫の眞心を　　いとも詳さに現はしぬ
離久の夢も今さめて　　神の結びし我夫に
巡り會ひしも古の　　深きゑにしの循り來て
汝と再び添臥しの　　夢路を辿る新枕
身魂の筋を白浪の　　淵に沈んだお前の心
照子の姫を餘所にして　　心も清き清子姫
秋波を送り玉ひたる　　心の空の情なさよ
恨み歎つぢやなけれ共　　盡きぬゑにしに搦まれて
結ぶの神の結びてし　　二人の仲は此沼の
いと淺からぬ契合ひ　　久遠の夢は今爰に

漸く晴れてたらちねの　　神の身魂のいそ〳〵と
歡ぎ玉へる今日の日よ　　千代も八千代も永久に
汝は我身の脊となりて　　いつくしみませ吾れも亦
汝をこよなき夫となして　　神の依さしの神業に
仕へ奉らむあが願ひ　　汝が心の岩の戸を
開いて語れ胸の奥　　ア、惟神〳〵々
御靈幸はひまし〳〵て　　此岩窟のいや堅く
彌永久に變りなく　　天の御柱つき固め
國の御柱永遠に　　固く契らん夫婦仲
ア、照彦よ〳〵　　天津御空に月は照る

日は照る曇る世の中に　二人の仲は永久に
心に浮ぶ日月は　互に照彦、照子姫
月日は照る〳〵常世は曇る　愛と愛との互の胸に
神の情の雨が降る」

と言ひ終つて、照彦の手を取り奥深く導き入る。照彦は手を曳かれ乍ら、此やさしき美はしき女神の後に從ひ、精神恍惚として、前後も辨へず、只々感謝喜悅の涙に咽び乍ら歌ひ出した。

照彦「琉球の沼の水清く　塵をも止めぬ清子姫
心の色も清彦が　水火を合せて神業に
仕へ奉るぞ芽出度けれ　汝の心も照子姫

引かれて進む照彦は　初めて晴れた戀の暗
二人の妻に手を引かれ　黄金の橋を渡るよな
涼しき心地の二人の男の子　雲井の空に彌高く
神の救ひの舟として　金銀銅の三橋を
昔の神の渡りたる　清き思ひに充たされて
天教山に降るごと　日頃戀ひたる我思ひ
こゝに愈〻擅の御柱巡り合ひ　あなにやし奸男
あなにやし好乙女をと　千代の契を礎固めたる
清けき神の行ひを　繰返す如き心地して
引かれ行く身ぞ樂しけれ　月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも　三五の月の御教は
堅磐常磐に照れよかし　我等二人の其仲は
三五の月の何時迄も　天津御空にいと聞く
琉球の沼に影映し　天に輝く照彦や
沼に映りし照子姫　天と地とは永久に
照る〳〵光る花は咲く　彌永久に桃の實の
落ちずにあれや夫婦　神の結びし此ゐにし
幾億萬年末までも　二人は手に手を取りかはし
天津御空の星の如　濱の眞砂の數多く
御子を生め〳〵永久に　人子の司となり〳〵て

此浮島の守り神
御靈幸はひまし〳〵て
醒めずにあれや永久に
と歌ひ終つた。忽ち奥の間の隔ての戸を引開けて中より現はれた、清彦、清子姫の二人、顏色麗しく笑を湛へて、清子姫は照子姫の手を取り、清彦は照彦の手を取り、琉球疊を布きつめた、岩窟に似合はぬ美はしき居間に導いた。バナ、、いちご、柿、木茄子、林檎其外種々の美はしき果物、沼の特産物たる赤貝の肉、石茸なぞ數多並べられ、こゝに二夫婦は芽出度く夫婦の契を結ぶ事となつた。

ア、惟神々〳〵
二人の夢は何時迄も
神の御前に願ぎまつる」

是より清彦、清子姫の二人は此沼を中心として、さしもに廣き琉の島の守り神となり、子孫永遠に榮えて、神の如く敬はれ、數多の土人は其德に悅服し、世は太平に治

まつたのである。次に照彦は照子姫と共に、南の島に渡り、同じく此島の守り神となつて子孫繁榮し、土人に神の如く、親の如くに尊敬された。

南の島を一名球の島と云ふ。今の八重山群島は球の島の一部が殘つて居るのである。

照彦夫婦は時々球の島より、遠く海路を渡り、臺灣島の北部にまで、其勢力を擴充して居た。

（大正一一、七、二八、書六、五、松村眞澄筆）

第一八章　神格化（八〇〇）

清彦、清子姫、照彦、照子姫の二夫婦は茲に目出度結婚の式を擧げた。槻の洞穴に在る父の常楠に報告し、且つ親子の杯を結ぶべく此岩窟を立出で、エム、セムの二人を初め四五の從者と共に鰐魚の船に身を委せ、さしもに廣き琉球沼を渡つて茫々たる草野を分け、辛うじて其日の夕間暮、常楠が洞穴の館に辿り着いた。

常楠は四五の土人と共に祭壇の前に、清彦、照彦の幸福を祈りつゝ、言依別一行の海上無事を祈る眞最中であつた。二人の兄弟は二人の美はしき新妻を伴ひ、數多の供人を從へ意氣揚々として茲に歸つて來た。常楠は一心不亂になつて祈願に餘念がなかつた。兄弟夫婦は其傍に端坐して感謝祈願の言葉を奏上した。常楠は祝詞の奏上を了り後

振り返り見れば、清彦、照彦は容色端麗なる二人の美女と共に行儀よく坐つて居た。

清彦「父上様、只今無事に歸りました」

照彦「嘸お待兼で御座いましたでせう」

常楠「ヤア思ふたよりは早く歸つて來て下さつた。ヤアお前は此間此處を立去つた清子姫、照子姫の二人ではなかつたか。縱から見ても横から見ても瓜二つ、寸分違はぬ綺麗な女、どうして御座つたか。此常楠も氣が氣でならなかつた。マアノ〳〵無事で何よりもお目出たい」

清子姫「貴方が噂に高き常楠の御父上で御座いますか。妾は清彦さんの女房になりました。どうぞ末永く可愛がつて下さいませ」

照子姫「妾は照彦さんの妻で御座います。お父様、初めて……否再びお目に懸ります。好くも御無事で居て下さいました。どうぞ末永く我子として愛して下さいませ。何分不束な者で御座いますれば、お構ひなくお叱り下さいまして、幾久敷く御召使ひの程をお願申します」

常楠は涙を浮べ乍ら

常楠「ア、二人共好く言つて下さつた。此常楠も是にて最早心殘りは在りませぬ。夫婦仲好くどうぞ神業を完全にお務め下さい」

清子姫と照子姫は「ハッ」と計りに首を下げ、嬉しさと懐さの涙に暮れて居る。

常楠は祝意を表し且つ自分の素性を明かす可く、銀扇を擴げて老の身にも似ず、聲爽かに歌ひ始めた。

常楠「千早振る古き神代の其昔　神の都のエルサレム

國治立大神の
世を召食す其砌
妻國姫と諸共に
仕へ奉りし甲斐もなく
子孫は四方に散亂し
玉姫二人は自轉倒の
我れを生して何處ともなく
親に離れし雛鳥の
自轉倒島を遠近と
細き煙を立て乍ら
いや永久に鎖まりて
遠津祖の國彦が
神の御祭り麻柱て
醜の健の强くして
吾が父母の玉彦や
島に姿を隱しつゝ
清き姿を隱し給ひぬ
寄る邊渚の常楠は
巡り〳〵て紀の國に
情なき浮世を送る折
天の岩戸の大變に
世の荒浪に吹き捲られて
頃しもあれや先つ年
絡み合ひたる親子の對面
心の色も清彦や
盡きぬ緣を喜びつ
熊野の瀧の禊場に
心清むる折もあれ
常楠、若彦兩人は
いや永久に隱されし
逢ひしが如く親と子は
分れ〳〵に世を送る
尊き神の計らひに
秋彦、駒彦始めとし
照彦四人に巡り會ひ
月日を送る其中に
三五敎の若彦と
木花姫のあれまして
琉と球との神實の
秘密の國の琉球島

龍の腮の寶玉を
瑞の命に献ぜよと
其神勅を畏みて
雨に浴し風に梳づり
浪に呑まれ漸々に
上りて見れば昔より
谷間に清き玉の湖
玉の勢ひ若彦と
天津祝詞を奏上し
神の命を言向けて

受取りまして言依別の
言葉厳かに宣り給ふ
汐の八百路を打渡り
大海原の潮をかぶり
琉と球との此島に
人跡絶えし深山路の
老錆果てし常楠も
日毎夜毎に上り來て
大龍別や大龍姫の
琉と球との寶玉を

三五敬の言依別に
心定めし龍神の
浪路をわけて渡り來る
國依別と諸共に
此洞穴に現れまして
ハーリス山の谷間を
龍の顕の寶玉を
歸り來れる嬉しさよ
如何なる神の引合せか
清子の姫や照子姫

奉らんと村肝の
胸も開けし時もあれ
言依別の大教主
假りの宿りと定めたる
此處に四人の神司
心いそ〳〵進みつゝ
恙も無しに手に入れて
伴の清彦、照彦は
我れの住家を訪ね來て
四人は早くも假の家に

來り居ませる不思議さよ
國依別を伴ひて
島に出でんと宜らせつゝ
伴ひ來りし若彦に
持たせて遙に自轉倒の
此常楠を琉球の
伴清彦、照彦を
波を渡りて出で玉ふ
清子の姫や照子姫
契を結び永久に

言依別の大敕主
浪路を渡り高砂の
此常楠が浪の上
琉と球との寶玉を
島に歸させ給ひつゝ
島の守り神と神定め
左守右守の神として
清彦、照彦兩人は
此處に目出度く妹と脊の
此浮島を守らんと

思ひし事も水の泡
闇に紛れて何處となく
清彦、照彦兩人が
如何ならんと父母の
天と地との神々に
籠めて祈りし甲斐ありて
照子の姫の若嫁に
あゝ惟神々々
夫婦の仲は睦まじく
鴛鴦の契の何時迄も

清子の姫や照子姫
姿隱させ玉ひしより
心の中の苦しさは
我苦しみは一層ぞ
朝な夕なに眞心を
今日は嬉しき清子姫
巡り會ふたる嬉しさよ
御靈幸倍ましまして
千代も八千代も永久に
變らであれやどこ迄も

常磐の松の色深く　　褪せずにあれや夫婦仲
最早此世に殘りなし　　我はこれよりハーリスの
山の尾の上を乘り越にて　　此神島を永久に
守らん爲めに萬代も　　命永らへ山人の
群に加はり長となり　　世を永久に守りなん
汝清彥、清子姫　　光浴き照子姫
心も清く照彥と　　彌永久に何時迄も
南の島に出でまして　　神の御業に仕へかし
朝日は照るとも曇るとも　　月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも　　我の身魂の此島に

止まる限り心安の　　浦安國と幸はひて
神の惠の露の雨　　堅磐常磐に降らせなん
最早此世に殘りなし　　孰もサラバ」と言ふより早く
天の數歌謠ひ上げ　　合掌するや常楠は
全身忽ち雪の如く　　眞白になりて木の丸殿の入口を
一足二足跨げ出しと思ふ間に　　忽ち姿は白煙に
磯吹く風の音高く　　空に聞ゆる計りなり
兄弟夫婦は驚いて　　木の丸殿を走り出で
空を仰いで手を合せ　　父よ〳〵と呼ぶ聲も
吹き來る風に遮られ　　尋ぬる由も泣く計り

天を仰ぎ地に伏して　親子の果敢なき此別れ
嘆き居るこそ哀れなれ　あゝ惟神々々
御靈幸倍坐ませよ。

（大正一一、七、二八、稿六、五、谷村眞友錄）

＝海洋萬里（寅の卷）終＝

海洋萬里寅の卷奥附

定價金壹圓五拾錢

大正十二年六月十五日印刷
大正十二年六月廿日發行

編輯者　櫻井重雄
京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地

發行兼印刷者　近藤貞二
京都府何鹿郡綾部町大字神宮寺一番地ノ一

印刷兼發行所　天聲社
京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地
【振替大阪六〇五三四】

不許複製

▽豫告

海洋萬里（辰の巻）七月十五日發行の豫定

海洋萬里（巳の巻）八月一日發行の豫定

海洋萬里【卯の巻】目次

序文……頁

凡例……

總說……

第一篇　高砂の島（一四三）

第一章　カールス王……

第二章　無理槍……

第三章　玉藻山……

第四章　淡溪の流……

第五章　難有迷惑……

第六章　廉の紊れ……

第二篇　暗黑の叫（一四四）

第七章　無痛の腹……

第八章　混亂戰……

第九章　當推量……

第一〇章　縺れ髮……

第一一章　木茄子……

第一二章　サワラの都……

第三篇　光明の魁（一四五）

第一三章　啞の對面……

第一四章　二男三女……
第一五章　願望成就……
第一六章　盲龜の浮木……
第一七章　誠の告白……
第一八章　天下泰平……

第四篇　南米探險（一四八）

第一九章　高嶋丸……
第二〇章　鉈理窟……
第二一章　喰はぬ女……
第二二章　高砂上陸……

海洋萬里（卯の巻）目次　終

申込所　丹波綾部町　天聲社
振替口座大阪六〇五三四番

王仁文庫（全十篇）

出口瑞月氏が神授の大經綸と天來の大抱負と、縱横の大神機と時に應じ機に臨みて、隨所に閃發せし文章詩歌其他二十有餘年間積んで山をなす。乃ちその中より、精粹を拔き、珠玉を選び、序を正し類を纂め、王仁文庫と題して茲に刊行の機運に向へるは誠に時代の急迫の然らしむる所にして、實に百萬讀者の渴望を醫する神液甘露たりと謂ふべし。

王仁文庫
第一篇
皇道我觀

定價　金五拾錢
郵税　金貳錢

「皇道我觀」は皇道の眞髓を縱說橫論し、世道人心の歸趨を指示せる大文字にして皇國の臣民たる者の必讀の名著たり。

王仁文庫
第二篇

國教論集

定價 金五拾錢
郵稅 金貳錢

本篇には「國教樹立論」「信仰の墮落」「皇國傳來の神法」「太古の神の因緣」の四篇を收む。皇道の眞髓は一貫して漲り溢れ、國教は腐敗し信仰の墮落して其極に達したる混沌の現今を救ふは本篇に依らざるべからず、太古の神々の因緣は必ず見落す勿れ。

王仁文庫
第三篇

瑞能神歌

定價 金五拾錢
郵稅 金貳錢

瑞の神歌は裏の神諭にして仁愛大神の人類に與へられたる神示なり、方舟なり、救世の綱なり、すみやかに起りつゝあり亦速やかに起るべき大地獄道の火焰をまぬがれんとせば、本篇を見よ。叩かざれども開かれし救の門、求めざれ共仁慈の神は之れを與へられぬ。迷ふ勿れ!!來れ!

王仁文庫
第四篇

記紀眞解

定價 金五拾錢
郵稅 金貳錢

世に國學者を以て任ずる者徒に多しと雖も、眞の古事記を解する者一人として無し、日本書記を解する者亦あるなし、之れ其內義を理解する能力なき爲めなり、本篇は「古事記」の一節及び「日本書記」の一節を解釋し密義を發現されしものにして現代と併せ解釋され必ず何人も肯定する樣平易に解かれしもの也